

「鶴見大学仏教文化研究所紀要」第14号（平成21年4月）抜刷

總持寺五院の成立と展開

納
富
常
天

總持寺五院の成立と展開

前大本山總持寺宝物殿館長 納富 常天

はじめに

總持寺五院は總持二世峨山韶碩（一二七六—一三六〇）の五人の高足（五哲）太源宗真（？—一三七二）、通幻寂靈（一二三二—一三九一）、無端祖環（？—一三八七）、大徹宗令（一二三三—一四〇八）、実峰良秀（？—一四〇五）を開基として、總持寺山内に造立された塔頭Ⅱ普藏院・妙高庵・洞川庵・伝法庵・如意庵である。塔頭は中国禅林以来、伝統的に高僧の墓所（一般僧の墓所は普同塔）であり、總持寺山内にも法光院という峨山の塔頭があつた。^①しかし總持寺は輪番という住持制を設けたためとも思われるが、五哲はそれぞれ開創した寺院に墓所を定め、總持寺山内には建塔せず、そのかわりか法光院に入牌している。それは永光寺藏『能州諸嶽山總持禪寺住山之次第』に、三世太源宗真から二百廿六世朴堂良淳まで、いずれも「不寂入牌」^③とあるのみならず、応永九年（一四〇二）大徹宗令らによる「總持寺門徒

連署規式写」^④から明らかである。したがって五院は塔頭と呼称はしているものの、本来の墓所ではなく、開基像をおいた各門派の拠点的性格のものであったと思われる。

ここでは平成二十三年、御移転（明治四十四年十一月五日、輪島市門前から横浜市鶴見への移転）百周年を記念し、總持寺宝物殿に所蔵する五院輪住帳十冊（普蔵院三冊、妙高庵一冊、洞川庵二冊、伝法庵二冊、如意庵二冊）をはじめ、関係資料を中心に五院の成立時期を追究し、さらに五院の変容とその実態を考察するとともに、五院輪住帳を普蔵院から順次復刻して、その実情や問題点を探り、あわせて『總持寺住山記』^⑤との関係にも言及したい。

(1) 貞治四年（一三六五）三月八日、尼しゅ一の寄進状に「合二百かり（一段）のうち一たん（中略）ししやう（師匠）かんさん（峨山）おしやうの御たんちう（塔頭）へゑいたいきしん申候」、『加能史料』南北朝Ⅱ二六〇頁、同五月十五日、尼りやうこの寄進状に「合百かり（一段）ししやうかつさん（峨山）おしやうの御たんちう（塔頭）へきしん申候」、『加能史料』南北朝Ⅱ二六二頁、貞治五年十月二十日「峨山和尚示寂祭文」に「示滅法光院、同二十八日「峨山韶領遺物配分状」に「就于法光院抄割」（『新修門前町史資料二、總持寺』二二頁～二三頁、その他貞治六年二月九日、長瑠璃若（二段、同九月十四日長義勝（二段、同十一月一日、長氏尼見祐（百苾刍一段、安永元年（一三六八）四月二十日、長宗悟の寄進状（いずれも『加能史料』南北朝Ⅱ）があり、相当な寺領を所有していた。

(2) 太源宗真は加賀仏陀寺に示寂（『本朝高僧伝』卷第三二・四三九上）、通幻寂靈は永沢寺・竜泉寺の両所に建塔（『日本洞上聯燈録』曹洞宗全書史伝二六〇頁）、無端祖環は越後祥園寺において滅を唱う（『日本洞上聯燈録』二六二頁、大徹宗令は越中立川寺に建塔し、獅子庵と称す（『日本洞上聯燈録』二六三頁・『本朝高僧伝』卷第三七・五〇九上）、実峰良秀は備中永祥寺に住して終る（『本朝高僧伝』卷第三六・五〇七上） 参照。

(3) 『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第四号所収「總持寺住山記」について 参照。

(4) 応永九年（一四〇二）八月十五日、大徹宗令らによる「總持寺門徒連署規式写」に「法光院入牌之事、御影之左者峨山直弟之尊宿之位牌外者不可立候、孫弟之位牌被入事不可然候、其故者、峨山直弟之長老并孫弟之長老可致礼処也、其余之位牌者皆々右方可被立候、故者、伝燈院・紹燈庵（共に永光寺内）皆以如此候」（『新修門前町史』資料編2總持寺四三頁）とあり、入牌

の在り方について定めている。

- (5) 開山瑩山紹瑾から四万九千七百六十六世大仙和尚（明治三年七月二十五日）にいたる總持寺住持名簿。二世以降は嗣法師名（十一世・十四世は入寺年月日あり）、十八世日山良旭以降は嗣法師名、入寺年月日が記録されているが、時代が下ると原則として門派名、寺名、号諱、受業師・嗣法師名、入寺年月日、出身地が記され、教団史研究の上で貴重な資料である。

(二) 五院の成立時期について

五院の成立時期については栗山泰音『總持寺史』に、従来人によって出世輪住した制度を改め、寺に依って輪番住持する門役を兼ねた輪番制度が設けられたとすると同時に、その成立時期は普藏院住番牒の首部が天正十五年（二五八七）であるから天正以後としている。⁽¹⁾

しかし總持寺宝物殿の古文書を精査すると、五院の成立に関する資料がいくつかある。まず最初に貞享三年（二六八八）五月廿五日付の「五院并塔頭中由緒書并五院什物目錄」であるが、これに總持寺五院開基を掲げて「右總持寺開山・二代峨山迄独住持、其後觀応二年二五院開闢仕候。貞享三年迄三百三十六年二罷成申候、五院未派り毎年八月十五日二五院輪番入替、總持寺持来候、五院之儀、總持寺境内二御座候」とある。これは觀応二年（二三五一）に五院が成立したことを示す。また『禪学大辭典』もその典拠は明らかでないが、同じく觀応二年春、五支院を開き、その住持より總持寺に輪番住持の制を始めたとしている。⁽³⁾ もしそうだとすると通幻寂靈は三十歳で妙高庵を、また大徹宗令は十九歳で伝法庵を開いたことになる。通幻は暦応三年（三四〇）大乘寺明峰素哲（一二七七—一三五〇）に投じて朝煥夕練し、觀応元年（二三五〇）明峰の遷化にあうも大乘寺に留まって功夫弁道し、文和元年（二三五二）の春、總持寺の峨山に投じているから、觀応二年当時はまだ總持寺に掛搭もしていない。また大徹も十九歳で伝法庵を開くということは常識的に考えられない。⁽⁴⁾

つぎに、応永十五年（二四〇八）十月二十五日の「惣持寺前任侑籍等連署置文 延寿堂分田之事」⁽⁵⁾と、応永十八年（二四一二）六月十一日の「梅山聞本等連署普藏院規式 普藏院末代制誠之事」⁽⁶⁾（福井県竜沢寺文書）である。前者の「延寿堂分田之事」には、如意良受、洞川梵玖、妙高性禪、伝法元三、前惣持侑籍（実峰良秀の弟子）が連署しており、後者には「普藏院末代制誠之事」とあるから、少なくとも応永十八年には五院が存在していたことは間違いない。

しかしつぎに示すような資料があり、さらに早い時期に成立していたことがわかる。(1)明徳元年（二三九〇）二月十五日の「通幻和尚遺誠記文写」⁽⁷⁾に、丹波永沢寺は老僧（通幻）の法嗣が輪次に住すべきとともに、越前竜泉寺や妙高庵も同じとしている。(2)明徳元年十月二十日の「通幻寂霊・大徹宗令・実峰良秀が連署している「總持寺尽末來際條々置文事」」⁽⁸⁾に定めた「新命之請狀從諸塔頭承門徒之儀、各別可加判者也」や「於當寺可書寺号事」には「諸塔頭坊主、御影侍者之外不可掛錫」とある。(3)明徳二年（二三九二）五月五日の「總持寺第五世通幻大和尚喪記」⁽⁹⁾には、喪使に仏陀寺、宗悟藏司、祥園寺とともに伝法庵（竺山得仙）とあり、鎖龕に都寺善玖とともに時主妙高（庵）とある。また拳龕に仙（竺山得仙）首座、伝法庵とある。(4)明徳二年五月十二日の「寄藏諸寺什物」に妙高庵分として袈裟壹縁⁽¹⁰⁾などが記してあり、同年八月十五日の通幻卒哭忌（百ヶ日）には妙高庵が竜泉寺・永沢寺・寺寺院とともに勤めている。⁽¹¹⁾これらの資料から少なくとも妙高庵と伝法庵は明徳二年には存在したことがわかるが、先にあげた「總持寺尽未來際條々置文事」に諸塔頭とあること、さらには永光寺における康暦元年（一三七九）八月十五日「永光寺領若部保檢注名寄帳」に開山瑩山紹瑾の四門人明峰素哲の紹燈庵、無涯智洪の新豊庵、峨山韶碩の大雄庵、⁽¹²⁾壺庵至簡の宝鏡庵という塔頭が寺内にあり、各門派の拠点として機能していたことなどを勘案すると、妙高庵、伝法庵以外の塔頭も成立していたと思われる。また、五院の機能については不透明であるが、応永十五年（二四〇九）九月十六日の石屋真梁等連署にかかる「通幻寂霊門下僧達連署妙高庵置文写」⁽¹⁴⁾の法嗣帳次第にみられるように、通幻の弟子十一人からなる

法嗣次第を掲げ、その次第に従って妙高庵の住持を三年三ヶ月勤めることなどを定めたもので、その機能の一面面が知られる。あるいは、他の庵もこれに類似した活動をしていたものと思われる。なお法嗣次第十一人中一徑永就、天真自性、天鷹祖祐、了峰正杲、量外聖寿の五人は『總持寺住山記』にその名を見出すことができない。これは『總持寺住山記』の性格を考える上で非常に注目しなければならない。これは若しかしたら、当時すでに總持寺輪住と、妙高庵輪住Ⅱ五院輪住が併存し、總持寺に輪住しなくても五院への輪住は行われていた、あるいは可能だったことを暗示するもので、両者の関係を考えるうえで重要である。

- (1) 『總持寺史』五三四頁参照。
- (2) 『新修門前町史』資料編2總持寺一〇九頁以下参照。
- (3) 『禪学大辭典』七三二頁下段参照。あるいは『總持寺誌』一五五頁の『五院輪住の組織』に「ここに於て觀応二年辛卯の春、五禪師のおの地を寺中の東西に構え、本山五院の制を創めたまふ（大本山總持寺由来抄）」に拠ったものかと思われる。
- (4) 『日本洞上聯燈錄』卷第二（日仏全一・一〇・二五九上・下）参照。
- (5) 『新修門前町史』資料編1考古・古代・中世一九六頁参照。なお応永十五年九月十六日の「通幻寂靈門下僧連習妙高庵置文」（兵庫県永沢寺文書）に「右、以此法嗣帳次第、当寺（永沢寺）」「惣持寺妙高庵堅為住持、三年三月堅可守」（『新修門前町史』資料編2總持寺四四頁）とある。
- (6) 『新修門前町史』資料編2總持寺四四頁参照。
- (7) (8) 『新修門前町史』資料編2總持寺三八頁参照。
- (9) 『加能史料』南北朝Ⅲ三七頁以下参照。
- (10) 『加能史料』南北朝Ⅲ三四四頁参照。
- (11) 『加能史料』南北朝Ⅲ三四三頁参照。
- (12) 『永光寺史料調査報告書』口絵三六古文書参照。なお若部保は永光寺利生塔の塔婆料として暦応三年（一二四〇）三月六日に足利尊氏が寄進したもので、永光寺におけるもつとも重要な寺領であった。

(13) 年月未詳「永光寺大雄庵等田地目録」の「峨山和尚塔頭大雄庵田地」によると羽咋湊保北方の田地二十二反五十刈の寺領があった。(『新修門前町史』資料編2総持寺三五頁)

(14) 『新修門前町史』資料編2総持寺四四頁参照。なお十二世普濟教、十六世了庵明は入寺年月日が記録されていないので、住持期間は不明だが、十九世不見見一年七ヶ月、二十世石屋梁是一年八ヶ月、二十三世芳庵巖一年六ヶ月、二十九世天徳貞六ヶ月となっており、最初から守られていない。いかなる事情があったのだろうか。

(二) 總持寺輪住制の変容

總持寺輪住制については、總持寺御移転の記念事業として、明治四十四年八月出版された不朽の名著栗山泰音『嶽山史論』第七章以下や、一宗成立の歴史、とりわけ總持寺の歴史を詳述した栗山泰音『總持寺史』第四篇世系史、さらには峨山韶碩六百回大遠忌を記念し、總持寺の全貌を紹介した室峰梅逸編『總持寺誌』住持篇(輪住時代)に住持職の変容および輪住期間の変化など、資料に基づく優れた研究成果があるので、これをふまえてさらなる資料の渉獵と検証を行い、また『總持寺住山記』の読み直しなどにより、輪住期間、輪住の交替期、五院確立後における總持寺輪住(従来の勅住)と五院輪住の問題、勅住は總持寺世代に入り、五院輪住は總持寺の護持・運営管理に関わるが、その時期や内容、さらには輪番地の設置と助住の問題など、時代の推移にともなう輪住制の実情を考察したい。

峨山韶碩は總持寺住持職について二回にわたり置文をしている。^①最初は康安二年(一三六二)二月九日の「總持寺未來住持職事」で

右、彼の寺は、瑩山和尚、韶碩に譲与する処なり。仍って後代の住持職においては、韶碩法嗣の中において、器用の仁を撰んで住持職に補すべし。末代において此の旨を守り、住持すべきの状、件の如し。

康安二 壬 二月九日 住持韶碩(花押)^② (原漢文)

とあり、法嗣の中から器用の仁を住持にするよう定めている。これは總持寺の輪住は峨山門下の法嗣、さらには法孫に限定するものだった。また二年後の貞治三年（一二三六）十二月十三日の「惣持寺山門住持職事」では

紹領門下、嗣法の次第を守り、五ヶ年住持すべし。若し此の中、山門の廢あらば、法眷等相寄り、これを評定すべし。仍つて後証のために垂示、件の如し。

貞治三年十二月十三日

惣持紹領（花押）⁽³⁾
（原漢文）

とあり、嗣法の順序次第を守つて五ヶ年住持するよう示している。このように再度にわたり定書していること、とりわけ二度目の定書は峨山示寂二年前にあたり、總持寺住持職を通じて、いかに門流の發展を案じていたかがわかる。しかし峨山の意向は嗣法の次第や住持期間において、永くは続かなかつたようだ。それは嗣法の次第では『總持寺住山記』によると第五世通幻寂靈、第六世太山如元となつてゐるが、⁽⁵⁾「峨山法嗣目錄」では七番太山如元、十一番通幻寂靈となつており、順序が逆になつてゐる。あるいは自坊の経営や健康など何等かの事情があつたのかも知れない。

また住持期間も『總持寺住山記』⁽⁷⁾によると、十八世日山良旭以降は一部を除き入寺年月日が記録されているが、それ以前はわずかに十一世梅山聞本、十四世竺山得僊の二人が知られているだけである。これを基準に考えると、峨山の定めた五ヶ年とする住持期間は、第三世太源宗真が峨山示寂の貞治五年（一二三六）に入寺したとして、それから明德元年（一二三九）に入寺した第十一世梅山聞本まで八世で二十五年となる。これを単純計算すると三年余となり、余り遠くない時期にもろくもくずれていたとしなければならぬ。

このように嗣法の次第や住持期間も、すぐ乱れたことがわかるが、峨山十七回忌に相当する永徳二年（一二三二）十月二十日には「実峰良秀・大徹宗令等連署置文」がつぎのように発せられている。

当山住持職の事、二代和尚御遺記の如く、今に及び末代孫弟中において然るなり。但し然りと雖も、門徒の出仕は和合和伏の儀なくば、住持に請すべからず。各相い集り評定和評すべし。仍つて後証の為、置文の如し。

永徳二年 戊壬 十月廿日

前住良秀^(宗峰) (花押)

前任宗令^(大徹) (花押)

当主寂靈^(通幻) (花押)⁽⁸⁾ (原漢文)

これは總持寺住持職について、峨山の遺記の如く、孫弟中から選ぶとあり、峨山置文の存在意義が如何に大きかったかがわかるが、門徒の總持寺出仕について、和合和伏のうえ、住持に要請すべきこと、また各々評定し和合を確認するよう定めている。あるいは住持選定にあたり、不都合なことがあったのかも知れない。

そのようなことから再び明徳元年（二三九〇）十月二十日、峨山二十五回忌に通幻寂靈等が住持職について評議し置文を定めている。それは現状に即すべく輪住期間や交替の時期、さらには順序などを取り決めた「通幻寂靈等總持寺置文写」の「總持寺尽未来際置文事」（兵庫永沢寺文書）で

一、住持職事、当年十月より三十七箇月に至り告退あるべし。但し退院は十月二十八日、入寺は同じく廿二日をもって吉日を定むべきなり。

一、住院の次第は、師々の住院次第を追つてこれを請すべし、然りと雖も本寺不官の輩においては、これを請すべからず。未住の子孫と雖も、若し器用の仁あらば、門徒評議してこれを請すべし。⁽⁹⁾（後略）（原漢文）

とあり、住持期間については三十七箇月とし、退院は峨山忌（十月二十日）の關係と思われるが、十月二十八日、後住の入寺は十月二十二日としている。また住持は住院次第によるとすると同時に、本寺不官の無底派（奥州二州僧

録・曹洞第三の本寺である岩手県水沢市正法寺が拠点であった）・源翁派（地方教化に専念した）などは招請しないが、器用の仁があれば門徒評議の上その限りでないとしている¹⁰⁾。

最初の住持期間三十七ヶ月と三年については、三・四世の間は確かに遵守している。それはこの置文が十一世梅山聞本が入寺する二日前に評議されたものであり、十四世竺山得僊の入寺が應永五年（一三九八）十月二十二日であるから、その間三世で九年間であり、平均すると三年であることがわかる。

しかしその後十八世日山良旭の入寺は應永十二年（二四〇五）九月十五日であるから、竺山以降四世で八年であり、住持期間は平均二年となっているばかりか、日山は五ヶ月、十九世不見明見一年七ヶ月、二十世石屋真梁一年八ヶ月、二十二世竹臈智嚴・二十三世芳庵祖嚴が共に一年六ヶ月で、その余は七十一世惟忠守勤まですべて一年以下となっている。とりわけ五十世大綱明宗以降七十一世惟忠までは二・三ヶ月が大半を占めている。したがって入寺月日も日山以降区々別々で、住持期間と共に置文に違背している。

また住持次第については、門派間では普通だったらしく触れていないが、あるいは峨山の意向―法嗣の順序―をふまえたものと思われる。いま繁雑ではあるが、その間の門派をみると無等惠崇法嗣の十七世天庵禪曙、無際純照派中山曇環法嗣二十八世月浦珪光、太山如元派永穩妙忍法嗣三十世珠山從珍の三人を除き、いずれも五院門派が占めている。また、三世から十世までは峨山の法嗣であるから、これを除き、十一世梅山から七十一世惟忠までの門派名を挙げると、つぎのようになる。¹¹⁾（太〓太源派、通〓通幻派、無〓無端派、大〓大徹派、実〓実峰派、五門派以外の十七・二十八・三十世は★印にする）

太、通、無、大、実、通、★、大、通、通、実、太、通、無、大、実、太、★、通、★、無、大、実、太、通、無、大、大、実、太、通、無、大、実、太、通、無、大、実、通、無、通、大、実、太、大、通、実、通、大、

大、通、大、実、太、通、通、大、無、実、大

これを集計すると、太源派8、通幻派16、無端派8、大徹派15、実峰派11、五門派以外3となるが、これからわかることは最初一巡した後は順不同になり、とくに通幻派の十九世不見明見・二十世石屋真梁、六十六世玉聰良珍・六十七世大虫超虎、大徹派の三十七世大杖禅棟・三十八世普門元三、六十世藏石上幢・六十一世禅室宗安の八人四回が同門派で連続輪住し、その他は順不同ながら五門派が交替で就任している。これも住持次第に違背しているとしなければならぬ。

以上のように五十世大綱明宗以降、七十一世惟忠守勤までの住持期間は大半が二・三ヶ月であり、住院次第も乱れて危機的狀況にあつたから、現実を踏まえると同時に、峨山や通幻等の置文を勘案し、あるいは将来を見据え反省の意も含めて、永享二年（二四三〇）八月十五日（開山忌）に当住惟忠守勤（大徹派）ほか前住二十四世青山性秀（無端派）等十三名（大徹派五、太源・通幻・無端・実峰派いずれも二）連署により、五門跡（五院）による輪番住持制を改めて取り決めている。それは「総持寺住持職契状写」の「諸岳山惣持禅寺住持職事」で、つぎのようにある。

五門跡（五院）輪番次第を逐い、半年あて勤仕すべし。若し此の旨に背き告退の儀ありと雖も、次の門跡これを請取るべからず。住持此の条に違ひ年満ることなからしめば、其の門中より堅く寺家を守らるべきなり。然る間一住院中、二住持あるべからず。たとい輪番に相当すると雖も、器用の仁なければ、倩別人にこれを補さしむべし。ゆめゆめ輪番を缺すべからざるものなり。仍つて評議件の如し。

永享二季 戊辰 八月十五日

当住守勤（花押影） 前住良宗（花押影）

前住韶興（花押影） 前住玄淳

前任聖柔（花押影） 前任契養（花押影）

前任清良 前任梵清（花押影）

前任天間 前任禪棟（花押影）

前任正祖 前任宗林

前任性秀（原漢文）

これは五院による輪番住持の制度を取り極めたもので、住持職は半年勤仕すること、その期間は当該院が責任をもつて遂行することなどである¹³⁾。

しかし、『總持寺住山記』によりその後の住持期間を掲げると、つぎのようになる。

71世惟忠守勤	74世龍顔宗偉	三ヶ月	79世珂仲璽璠	七ヶ月	平均半年
75世無聞聖音	ハヶ月		80世大輝堅曜	五ヶ月	

76世中翁守邦	四ヶ月	平均半年	81世昌庵悦丰	82世昭海千周	半年
77世笑隠紹闊	78世竺庭慈僊		半年		

これを見ると、いかなる事情か明らかでないが、評議の当事者でもある七十一世惟忠はじめ、当初の四人がいずれも住持期間三ヶ月であるのみならず、これらの門派は大徹・太源・実峰・大徹派であって、住持期間はその門中で寺家を守るべしとする規定にも最初から違背している。しかし七十七世笑隠（無端派）・七十八世竺庭（大徹派）・八十一世昌庵（通幻派）・八十二世昭海（大徹派）の四人は契約通り半年勤仕している。また七十五世無聞（通幻派）と七十六世中翁（通幻派）、さらには七十九世珂仲（大徹派）と八十世大輝（太源派）はそれぞれ平均すると半年になるが、前者は共に通幻派だから、門中で寺家を守るとする規定には辻褄を合わせており、注目しなければならない。

現実に即するために改められた規定であつたにも拘わらず、当初から不履行気味だった住持期間を、二百二十六世朴堂良淳（寛政六年（一四六五）八月三日入寺）まで記されている『總持寺住山記』第一号によって八十三世以降をみると、つぎのようになる。

入寺年月日の記録がない百九十一世（号諱なし）・二百七十七世宝山正珍を除き、百七十九世心中賢孝・百九十五世錦江玄文・百九十九世茂林志繁の五ヶ月、八十三世天沢令徳・九十五世金峰宗玉・百四世石堂良珍・百八世明琳玄哲・二百六世徳巖章楊・二百九世寧仲梵康・二百十四世鷺山祖鵬・二百十九世太素常清の四ヶ月、合計十一人を除きすべて三ヶ月以下で、三ヶ月七十八人、二ヶ月二十八人、一ヶ月二十四人となっており、規定どおりにはなかなかいかなかったらしい。

總持寺輪住の実態はこのようであるが、『總持寺誌』によると、二十七世以後半年制になり、間もなく三月制が実行され二・五・八・十一月四回交替となつた¹⁴とあるが、必ずしもそうではない。それは百世喜山正讃から百四世石堂良珍、百十二世海岸祖超から百二十二世岱嶽応宗、百二十四世夢印英原から百三十四世清寧妙祐までは確かに二・五・八・十一月になっているので、あるいはこれらをとって論じられたものと思う¹⁵。

また『總持寺誌』によると、輪住制の初期は勅住即輪住であつたが、文龜元年（一五〇二）の頃から勅住と輪住が混交し、やがて勅住は世代に列し、輪住は世代に入らず五院輪番帳に登録し、住持職の実権を握ったとするとともに、混交期間は判明しないとしている¹⁶。

いま『總持寺住山記』にある入寺年月日により、總持寺輪住の実情を掲げると、およそつぎのようになる。

応永12年（一四〇九）～応永25年（一四一八） 一人～二人

応永26年（一四一九）～永享7年（一四三五） 二人～四人

永享8年(二四三六) 宝徳2年(二四五〇) 四人 五人
 宝徳3年(二四五二) 享徳4年(二四五五) 六人 九人(享徳3年四人)
 康正2年(二四五六) 明応9年(二五〇〇) 四人 五人(文明3年六人)
 明応10年(二五〇二) 永正5年(二五〇八) 六人 十一人(文亀2年五人、永正5年四人)
 永正6年(二五〇九) 永正10年(二五二三) 十七人 三十二人
 永正11年(二五一四) 大永7年(二五二七) 二十人 二十八人(永正18年十四人)¹⁷⁾
 これからわかるように、時代が下るにしたがい輪住者数が増加しているが、そればかりか永正六年(二五〇九) 閏八月二十八日以降、同じ日に複数輪住している。注目されるものを年次、輪住者数、月日、同日輪住者数などを掲げてみると、つぎのとおりである。

永正6年(二五〇九)	22人	閏8月28日	2人(初見)
永正7年(二五一〇)	25人	6月17日	2人
弘治2年(二五五六)	20人	7月28日	8人(すべて通幻派)
弘治4年(二五五八)	37人	3月16日	6人(すべて大徹派で越中出身)
永禄8年(二五六五)	37人	6月5日	12人(すべて通幻派)
元亀3年(二五七二)	39人	5月5日	16人(すべて通幻派)
天正8年(二五八〇)	37人	6月26日	18人(すべて通幻派)

このように輪住者が次第に増加し、宝徳二年(二四五〇)までは四・五人であったのが、同三年には六人、同四年と享徳二年(二四五三)は九人となっているばかりか、先に示したように永正六(二五〇九)・七年には、輪住者二十二

人・二十五人中、ともに二人が同じ日に輪住している。また弘治二（一五五六）・四年には同日に八・六人が輪住し、すべて通幻派および大徹派である。しかも大徹派はいずれも越中出身であることも注目しなければならない。¹⁸⁾

以上示したような輪住の状況からみると、『總持寺誌』が總持寺輪住（勅住）と五院輪住の分離は、文亀（一五〇二）頃としているが、さらに遡って宝徳四年（一四五二）前後とすることができ。さらに憶測が許されるならば、五院の成立は先に究明したように、明徳二年（一三九二）前後であるのみならず、応永十五年（一四〇八）九月の妙高庵における機能の一側面を語る「通幻寂靈門下僧連署妙高庵置文写」の法嗣次第に十一人が連署し、輪番で三年三ヶ月の住持を堅く守るよう定めているが、そのうち一徑永就・天真自性・天鷹祖祐・了峰正杲・量外聖寿の五人は總持寺に輪住していいことを考えると、これは他に関係資料がないから軽々には云えないが、あるいは当時からすでに總持寺輪住と妙高庵輪住は併存していたことを証するものと云ってよからう。また、總持寺へ輪住したものは『總持寺住山記』へ、妙高庵へ輪住したものは『妙高庵輪住誌』に登録したと推察することができる。

これはまた先に触れた永光寺における瑩山四門人（明峰・無涯・峨山・壺庵）の塔頭の動向も勘案すると、妙高庵と同じように他の塔頭も類似する機能をもち、その輪住も、總持寺輪住と併存し、それぞれの塔頭の輪住帳に登録していたと思われる。しかし五院輪住は任期一年で、總持寺の護持と運営管理にあたり、その間七十五日現方丈を勤めるようになったのは、天正以前の五院輪住帳が焼失などにより見ることでないので明らかでない。¹⁹⁾

最後に輪番地寺院の設置と助住の問題である。輪番地寺院は本山住持の栄誉と権利を五哲以外の子孫門葉に広く開放するとともに、五院輪番Ⅱ塔廟を守る義務を維持するために設置されたものであるが、その時期については『總持寺史』に天正十五年頃に至って初めて一定の輪番地による輪番制度が設けられ、その輪番地から派頭の五院に輪住すると、わずかに言及している。²¹⁾ また竹内道雄『曹洞宗教団史』においても成立の理由などについては論じているが、

その時期については明言をさせている。そればかりか現在まで関係資料も見出すことができないので、今後の研究に俟ちたい。

輪番地寺院は總持寺五院に輪番できる峨山系の地方寺院であるが、全国的に散在していたから、總持寺教団の全国的・飛躍的發展を促す起爆剤でもあった。この五院輪住は地方寺院にとっては名譽であったが、やがて義務化の傾向に変容した。それは輪住経費が莫大であったことや、輪住輕視の動向などがもたらしたものと思われる。

まず輪住経費については、伊予溪壽寺の『上山日記』⁽²²⁾によると住持と伴僧二人（侍者と典座）奉公人三人が上山しているが、その往復旅費・一年間の滞在費および諸経費を加算すると、少なくとも二百両以上は必要であったと思われる。そのために裏山の松を処分するなど経費の拮据に苦勞していることが知られている。

また輪住輕視の問題は、永享九年（一四三七）正月廿五日の「如仲天閑遺戒写」（静岡・崇信寺所藏）にみることができる。それによると梅山聞本（？一四二七）開山竜沢寺（越前）を本寺とし、普藏院寄進の三十貫文を竜沢寺の修理料に充当すること、普藏院塔主について、その法脊次第は末より本につくこと、輪住の次第は孫弟子をもつて勤めさせること、大源宗真が開いた仏陀寺（加賀）は、總持寺出仕を欠すると雖も五ヶ年住持（仏陀寺）を欠すべからず、若し欠したら嗣法の輩にあらずとしている⁽²³⁾。部分的には理解できない部分もあるが、普藏院さらには本寺である總持寺を輕視する姿勢は明らかである。またこれは太源派のものであるが、このような動向は他の五院門派にもあるいはあったのではないかと思われる。

つぎに設置された輪番地寺院は普藏院一〇三ヶ寺、妙高庵八五ヶ寺、洞川庵五一ヶ寺、伝法庵四九ヶ寺、如意庵五一ヶ寺、合計三九九ヶ寺であったが、普藏院・妙高庵は輪番地寺院が多いので五〇年に一回、洞川庵・伝法庵・如意庵はいずれも輪番地寺院が少ないので二十年に一回輪住しなければならなかった。

これは無端・大徹・実峰派における門流の衰退、さらには莫大な輪住経費や五院輪住軽視の動向などから、欠住という必然的な現象が起った。はじめは便宜的に山内の塔司から御影侍者として勤仕し、辻褃を合わせていたが、やがて二百年來擯出されていた源翁派²⁴、永光寺東堂の問題²⁵以来義絶關係にあった明峰派、出世の本寺であった正法寺（岩手水沢市）の無底・月泉・道叟の三派など、五院門派以外からの助住を要請することになった。洞川庵は無底（良韶）派、月泉（良印）派、道叟（道愛）派、つぎに伝法庵は明峰（素哲）派、無際（純証）派、源翁（心昭）派、如意庵は無著（妙融）派、竺堂（了源）派、寒巖（義尹）派が助住することになったが、無際派のみは助住していない。

いま五院の輪住帳により助住の実情を探ると、洞川庵は元和四年（一六一八）から明治三年（一八七〇）まで二五三年の間に無底派8回、月泉派71回、道叟派99回、合計一七八回であるが、それ以外に太源派5回、通幻派4回、大徹派1回、普濟派（通幻派下）1回の輪住を数えるが、欠住は二十七年にのぼっている。つぎに伝法庵は元和六年（一六二〇）から明治三年（一八七〇）まで二五一年の間に、源翁派が45回助住しているが、明峰派と無際派は一回も助住していない。しかし通幻派・太源派・実峰派が各一回補住し、欠住は一三年である。また如意庵は元和四年（一六一八）から明治三年まで二五三年の間に、無着派35回、竺堂派6回、寒巖派（法王派）3回の助住以外に、助住制度では伝法庵に助住することになっていた明峰派が3回助住しており合計四七回であるが、そのほかに太源派6回、通幻派7回、大徹派2回、天真派（通幻派下）1回の補住がみられるのみならず、欠住が四二年の多きにのぼっていることは注目しなければならない。

また普蔵院は輪番地寺院がもつとも多いにもかかわらず、承応元年（一六五二）、万治三年（一六六〇）の欠住2回があり、妙高庵もいかなる事情が明らかでないが、天保二年（一八三二）に太源派の薩州南林寺岱鷲が補住していることは無視することができない。また遠江大洞院、越後慈光寺・耕雪寺のように支配下寺院に代住させているが、これら

の実情と問題点については、後述する各塔頭の実情において考察することにした。

- (1) 『嶽山史論』は元亨四年(一二三四)三月十六日の「十箇条之亀鏡」第一条に「当寺は(中略)勅願所たる故に、予が嗣法の門人尽未来際当山を本寺となし、輪次の住持を勤め、宝祚の長久を祈り奉るべき事」(原漢文)とあるのを最初に掲げているが、總持寺が輪住制を設けたのは瑩山没後であるから、瑩山の意を体して門弟たちがまとめたものと思われる。『新修門前町史』資料編2總持寺一四頁参照。
 - (2) 『新修門前町史』資料編2總持寺一九頁以下参照。なお文中に「韶碩法嗣の中において」とあるから、總持寺の輪住は峨山門下の法嗣、さらには法孫に限定することになった。
 - (3) 『新修門前町史』資料編2總持寺二〇頁参照。
 - (4) 『總持寺誌』は共に「五ヶ年」を「五ヶ寺」と誤読したことから、五院の成立は貞治三年以前と理解している。
 - (5) 『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第四号二八頁参照。
 - (6) 『新修門前町史』資料編2總持寺二五頁参照。
 - (7) 『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第四号二三頁以下参照。
 - (8) 『新修門前町史』資料編2總持寺三三頁参照。
 - (9) 『新修門前町史』資料編2總持寺三八頁参照。
 - (10) 通幻派の天真自性や量外聖寿は住山していないが、その嗣希明清良と無闇聖音は住山している。また太源派でも了堂真覺は住山しなかったが、その嗣竹窓智嚴は住山している。
 - (11) 『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第四号「總持寺住山記」について二九頁以下参照。
 - (12) 『新修門前町史』資料編2總持寺五二頁参照。
 - (13) 竹内道雄『曹洞宗教団史』九三頁以下によると、輪住期間が五年から三年、さらに半年と変化短縮されたのは、当初の輪住制度が崩れたことを示すが、同時にこれは輪住制度の新しい変化発展と見てよく、曹洞宗教団の大発展の反映と考えてよいとしている。
 - (14) 『總持寺誌』一六〇頁参照。
- (15) 一〇五世日照韶光の入寺が六月一日であるから、一日前の五月の入寺であり、一〇九世伝翁智止の入寺が六月三日であるから、

四日前の五月の入寺であれば、百世喜山から一一〇世實中紹勅まで、二・五・八・十一月となる。

- (16) 『總持寺誌』 一六〇頁参照。なお『嶽山史論』 一〇六頁では五院輪番と瑞世転衣との離不離関係は他日の研究にゆずるとある。
- (17) 『嶽山史論』 一〇一頁以下参照。しかし文明十八年一人、長享元年二人とあるも、文明十八年四人、長享元年は五人である。
- (18) その後も同日輪住はしばしばみられ、とりわけ十人以上の主なものを掲げると、永祿八年（二五六五）六月五日十二人、元龜三年（一五七二）五月五日十六人、天正八年（一五八〇）六月二十六日十八人、慶安四年（二六五一）九月四日十二人、寛文二年（一六六二）四月十八日十三人、正徳六年（一七一六）閏二月十八日十三人、宝暦二年（一七五二）八月十四日三十九人、同十五日八人、同十六日二十四人、八月十七日二十六人、安永三年（一八四四）八月九日二十六人、同十二日二十五人などであるが、嘉永五年（一八五二）八月十五日は四十七人、同十八日三十三人、同二十日三十一人にのぼっている。
- (19) 永光寺の場合、塔頭は寺領を所有していたが、總持寺五院には関係資料がない。
- (20) 輪住期間は一年であるから、總持寺の運営管理は事実上、後見の芳春院や覚皇院、さらには五院に所属する山内二十二ヶ寺の塔司が行っていた。

(21) 『總持寺史』 五三五頁参照。なお『御直末・元輪番地寺院名鑑』序辞にも同じ趣旨がある。

(22) 總持寺所蔵。

(23) 『新修門前町史』資料編2 總持寺五三頁参照。

(24) 『總持寺史』 五五七頁参照。

(25) 『新修門前町史』資料編2 總持寺三二頁、永和四年十月廿二日「実峰良秀・大徹宗令等連署契状写」の洞谷住院之事参照。

(26) 『總持寺史』 五五六頁参照。

(27) 『嶽山史論』 一〇五頁、『總持寺史』 五三九頁参照。

(三) 『普蔵院住番牒』とその問題点

まず最初に『普蔵院住番牒』三冊（三冊目は『普蔵院輪住誌』）を復刻し、これに対応する『總持寺住山記』を下に掲げるとともに、輪住を国別・寺院別・輪住回数・門派名その他をまとめ、その実情と問題点について考察する。

(表紙貼外題)

直第卅二號

普藏院住番牒（表紙）

折本装 35・3×19・3 cm

※『普藏院住番牒』『總持寺住山記』は共に表記の方法が一定していないので、原本を損なわない範囲において、私的に統一した部分がある。

更作普藏院住番帳序

天下之諸老輪住五峰鎮護嶽山者乃峩山
禪師之遺訓而後兒孫繩々以至今日者也
然當院住番之輩大凡不下數百世而今始于
天正之季者何蓋中間有回祿之灾失之灰燼
惜哉山僧住院之日竊觀紙面隘陋不可久
存更作此帳以傳諸後後之住者記名於此
帳子之中可思先世之賢愚載之口碑而不
泯則後之人譏譽於今者明如水鏡吁

延寶二甲寅歲七月朔旦

遠州三倉榮泉寺綴山元補謹誌



如仲派内
喜山派

天正十五丁亥年八月十五日
能州七尾德翁寺儀州頂善住
到同十六年

梅山派内
大(太)初派

天正十六戊子八月十五日
能州三井興德寺大頭傳龍住
到同十七年

梅山派内
大(太)初派

天正十七己丑天八月十五日
越中玉龍寺覺翁惠等住
到同十八歲

梅山派内
如中派

從天正十八庚寅八月十五日
遠州龍雲寺秀金 住
到十九年

梅山派流
如仲派

天正十九辛卯八月十五日
能州松波滿福寺〔無庵〕榮紋住
到文祿元年

了堂派
直請

文祿元壬辰年八月十五日
石州龍昌寺 住
到同二年

梅山派内
太初派

文祿二癸巳八月十五日
能州三井興德寺大頭傳龍住
到三年

總持寺五院の成立と展開

梅山派内 直請 太初派	文祿三甲午八月十五日 奥州相馬同慶寺意麟 住 到四年
梅山派内 太初派	文祿四乙未八月十五日 能州七尾龍門寺貫應盛賀住 到慶長元年
梅山派内 如仲派	慶長元丙申八月十五日 遠州鳳岡寺玄鶴 住 到二年
了堂派内 直請 太容派	慶長二丁酉八月十五日 丹州徳雲寺別峰賢應 住 到同三年
如仲派内 物外派	慶長三戊戌年八月十五日 能州松波滿福寺〔無庵〕榮紋住 到四年
梅山派内 如仲派	慶長四己亥八月十五日 遠州智滿寺〔角應〕存麟 住 到五年
梅山派流 太初派	慶長五庚子八月十五日 能州七尾徳林寺久山周長住 到六年大聖寺乱故如此勤申候

〔總持寺住山記〕

同(太源)派 二千二百三十二世別峯應和尚 受業徳順和尚 (慶長二) 同年八月十六日 嗣法正貞和尚	同(太源)派 二千三百二世角應存麟和尚 受業命呂不上 (慶長四年八月十一日) 同年同月同日
同(太源)派 二千三十世久山長和尚 受業不識和尚 (天正廿) 同年八月十五日 嗣法安哲和尚 寺入	

梅山派内
如仲派
慶長六辛丑八月十五日
能州德翁寺儀州頂善 住
到七年

如仲派内
物外派
慶長七壬寅八月十五日
能州松波滿福寺芳充 住
到同八年

了堂派内
直請
慶長八癸卯八月十五日
能州雲龍寺〔鐵叟〕嚴策 住
到同九年

了堂派内
直請
慶長九甲辰八月十五日
丹州龍穩寺〔瑞雲〕春叟 住
到十年

如仲派内
大輝派
慶長十乙巳八月十五日
遠州原野谷最福寺〔月掌〕宗玖 住
到十二年

太初派内
直請
慶長十一丙午八月十五日
相州遠藤寶泉寺名代花翁院〔壁岑〕東文 住
到十二年

了堂派内
直請
慶長十二丁未八月十五日
和州悟眞寺大圓禪察 住
到十三年

太源派
二千三百六十三世国翁芳充和尚
受業天草和尚
〔慶長五八〕
同年同月十四日
嗣法無庵木山

太源派
二千二百三十六世春叟和尚
受業北學和尚
〔慶長二〕
同年十二月十二日
嗣法同

太源派
二千七百五世經巖東文和尚
受業
慶長十二丁未八月七日
相州之
嗣法朝岩和尚 人事

太源派
二千六十七世大圓察和尚
受業大頭和尚
〔文祿二〕
同年潤九月廿三日
嗣法兼學和尚

總持寺五院の成立と展開

梅山派内
太初派

慶長十三戊申八月十五日
能州七尾徳林寺久山周長住
到十四年

梅山派内
直請
太初派

慶長十四己酉八月十五日
奥州二本松龍泉寺明室紋達住
到十五年

梅山派内
如仲派

慶長十五庚戌八月十五マ
駿州坂本林叟院〔照山〕元春住
到同十六年

梅山派内
直請
太初派

慶長十六辛亥八月十五日
出羽國善寶寺骨窓運徹 住
到十七年

了堂派内
直請
奇叟派

慶長十七壬子八月十五日
大和國拾輪寺名代興禪寺文祝監寺
到同十八年

梅山派内
太初派

慶長十八癸丑八月十五日
能州七尾龍門寺貫應盛賀住
到十九年

梅山派流
直請
太初派

慶長十九甲寅八月十五日
奥州岩城龍門寺日岩紹察住
到元和元年

太源派
二千八百一世明室紋達和尚
奥州之
受業利書和尚
慶長十四己酉年八月三日
嗣法實山和尚
人事

太源派
二千七百八十八世照山元春和尚
駿河之
受業
慶長十四己酉年三月二日
嗣法權堂和尚
人事

太源派
二千九百七十五世日巖和尚
奥州之
受業天菴和尚
慶長十九寅年八月十二日
嗣法通岩和尚
人事

如仲派内
不琢派
元和元乙卯年八月十五日
遠州中田雲林寺泰岩是安住
到二年

梅山派内
直請
太初派
元和二丙辰八月十五日
加州小松玉龍寺德巖文堯住
到三年

梅山派内
如仲派
元和三丁巳八月十五日
駿州梅谷真珠院觀州泰察住
到同四年

梅山派内
直請
太初派
元和四戊午八月十五日
奥州相馬同慶寺觀庵正達住
到同五年

如仲派内
物外派
元和五己未
能州松波滿福寺〔心巖〕麗傳住
到同六年

梅山派内
太初派
元和六庚申八月十五日
能州七尾龍門寺久山周長住
到同七年

梅山派内
如仲派
元和七辛酉八月
遠州柴圓明寺好山長珉 住
到八年

同〔太源〕派
二千五百六十世泰岩是安末上

受業仙麟等膳末上
〔慶長九〕〔七〕〔廿三〕
同年 同月同日
嗣法豐山祖隆末上遠州人事

太源派
三千廿六世德岩文堯和尚

受業蘭谷和尚 薩州之
元和二丙辰八月十三日
嗣法春岩和尚 人事

太源派
三千卅四世觀州泰察和尚
〔永カ〕
〔明寺〕

受業鳳岩和尚 元和三丁巳八月十一日
嗣法器外和尚 駿州之人事 入寺

太源派 永平寺成直 觀
三千四十八世 正達和尚
同慶寺 庵

受業春悅和尚 元和四季
八月廿日
嗣法祖瑞和尚 奥州人事

同〔太源〕派
二千五百五十八世好山長珉末上
〔寺名ナシ〕

受業融山大祝末上
〔慶長九〕
同年七月廿三日入寺
嗣法巨雲慶含末上 遠州人事

總持寺五院の成立と展開

梅山派内 直請 太初派	元和八壬戌年八月十五日 羽州善寶寺大悦 住 到九年
如仲派内 喜山派	元和九癸亥八月十五日 遠州奥山善住寺大翁鑽道住 到十年
了堂開山 直請	元和十甲子八月十五日 薩摩國市來金鐘寺禹門舜伯住 到寛永二年
如仲派内 真岩派	寛永二乙丑年八月十五日 遠州懸川永江院〔朝國〕廣寅住 到同三年
了堂派 直請	寛永三丙寅八月十五日 石州龍昌寺〔獨峰〕幸存 住 到四年
如仲派内 不琢派	寛永四丁卯八月十五日 遠州小嶋正眼院〔祥山〕全吉住 到五年
了堂派内 直請 太谷派	寛永五戊辰八月十五日 丹州徳雲寺〔香山〕長磨 住 到六年

太源派 三千二百八十世長磨和尚 徳雲寺	太源派金鐘寺生國薩摩州 三千二百廿六世舜伯和尚 嗣法舜昨和尚 子八月十七日 授號同和尚
同（太源）派 三千三百九十二世全吉和尚 正眼院	受号泉室和尚 生國遠州之住人 寛永四丁卯八月十日 嗣法善宅和尚
授業師香林和尚 嗣法師嶺授和尚 丹州八月廿日 寛永五年	生國日州住

如仲派内
石叟派
寛永六己巳八月十五日
駿州富士保壽寺〔江國〕〔休〕 沢村住
到七年

太初派内
直請
如幻派
寛永七庚午八月十五日
相州遠藤寶泉寺〔悦堂〕存怡住
到八年

如仲派内
物外派
寛永八辛未八月十五日
遠州堀越海藏寺〔豁州〕昌達住
到同九年

了堂派内
直請
竹窓派
寛永九壬申八月十五日
能州雲龍寺梵龍
到十年
住

如仲派内
大洞院代住
大輝派
寛永十癸酉八月十五日
紀州和哥山窓譽寺〔甄外〕峰察住
到十二年

了堂派
直請
寛永十一甲戌八月十五日
出羽國酒田天昌寺〔霧山〕〔意〕 兼林住
到十二年迄

如仲派内
宗芝派
寛永十二乙亥八月十五日
駿州梅林院〔舉山〕長譽
住
到十三年

太源派
二千六百六十四世存怡和尚
受業存夙和尚
慶長十一丙午八月廿日
相州之
嗣法朝岩和尚
人事

太源派
三千四百六世昌達和尚
授号寿陽和尚
寛永四卯八月廿七日
生国遠州
嗣法昌蓮和尚
海藏寺

太源派
二千五百五十七世甄峯察禾上
授業蒲庵禾上
慶長九
同年七月廿三日入寺
嗣法玉山全礎禾上
遠州人事

太源派
二千八百六十三世長誉和尚
受業長善和尚
慶長十六年癸卯八月七日
嗣法存奕和尚
〔寺名なし〕

總持寺五院の成立と展開

如仲派内 喜山派	寛永十三 ^{丙子} 八月十五日 信州華林院嫩二	住		
如仲派内 物外派	寛永十四 ^{丁丑} 八月十五日 出羽國長井瑞龍院〔天外〕龍梵住 到十五年		太源派 四千百七十二世龍梵和尚 瑞龍院	受号師文龍和尚 寛永十一年九月五日 出羽國 人 事 嗣法師文察和尚
梅山派内 直請 太初派	寛永十五 ^{戊寅} 八月十五日 加州小松玉龍寺〔廣岩〕慧學住 到十六年			
如仲派内 逆翁派	寛永十六 ^{己卯} 八月十五日 遠州龍巢院〔北簡〕元壽 到十七年	住	太源派 盛源院 三千百八十八世元壽和尚	嗣法存意和尚 同年〔元和九年〕 壬八月廿八日 生國遠州 人 事 授業存意和尚
了堂派内 直請 竹窓派	寛永十七 ^{庚辰} 八月十五日 和州宇多悟真寺名代天照寺文迎住 到十八年		太源派 三千九百七十一世文迎禾上 天照寺	嗣法善察和尚 伊賀州人 事 〔寛永九〕〔八月十一日〕 同年 受業文清和尚 同日
如仲派内 不琢派	寛永十八 ^{辛巳} 八月十五日 遠州中田雲林寺安奕 到十九年	住		
梅山派内 直請 太初派	寛永十九 ^{壬午} 八月十五日 奥州岩城龍門寺〔才巖〕全藝住 到同二十年		太源派 四千百九十六世全藝和尚 富舜庵	受号師長全和尚 寛永十二 四月十三日 〔マ〕 嗣法師閔易和尚 出羽國人事

如仲派内
石叟派

寛永念癸未
駿州安部長光寺〔名翁〕全譽住
到念一年

梅山派内

直請
太初派

正保元年甲申八月十五日
奥州二本松龍泉寺住國達山住
到二年

如仲派内
大洞院代住
物外派

正保二乙酉八月十五日
遠州勾坂増參寺圍峰禮鐵住
到二年

梅山派内

直請
太初派

正保三丙戌年八月十五日
奥州相馬同慶寺同安洞察住
到同四年

如仲派内
大洞院代住
太〔大〕輝派

正保四丁亥八月十五日
遠州倉真世樂院金州関鐵住
到慶安元年

梅山派内
直請

大輝派
太初派平

慶安元戊子八月十五日
出羽國油利龍門寺悅菴門喜住
到同二年

如仲派内
喜山派

慶安二己丑八月十五日
尾州愛智妙仙寺南齡牛譽住
到同二年

太源派
四千百貳拾七世全譽和尚
慈雲院

受号師宗全和尚 駿州之人事
嗣法師高俊和尚 寛永十一年
三月五日

太源派
四千二百十二世達山和尚
龍泉寺

受号師紋達和尚 奥州之
寛永十二八月六日
嗣法師紋雄和尚 人事

太源派 但成直也
四千六百五十世 関鐵和尚
世樂院

受号師祖尤和尚 遠州之
寛永十九壬午二月廿八日
嗣法師関龍和尚 住僧也

太源派 但成直也
四千三百六十五世
龍門寺

門喜和尚 受号師門解和尚 出羽之
寛永十四丁丑年八月廿三日
嗣法師吾喜和尚 住僧也

太源派
四千五百十四世牛譽和尚
妙仙寺

受号師牛鉦和尚 尾州之
寛永十七年九月十七日
嗣法師同和尚 住僧也

了堂派内 直請	慶安三庚寅八月十五日 石州龍昌寺福州林幸 住
如仲派内 大洞院代 石叟派	慶安四辛卯八月十五日 遠州奥野長松院嶽安秀恕住 到五年
太初派 直請	承應元壬辰八月十五日 興禪寺林泰正福寺林芳監寺勤 到二年
如幻派	承應二癸巳八月十五日 遠州小嶋正眼院〔甄昌〕全察住 到三年
	承應三甲午八月十五日 江州今津〔津〕曹澤寺〔月舟〕賞清住〔盛〕 到明暦元年
	明暦元乙未年八月十五日 駿州真珠院〔来典〕玄撮 住
	明暦二丙申八月十五日 相州遠藤寶咏夺甫月嶺佐 住 到同三年

太源派 三千二百五十七世林幸和尚 竜昌寺 生国石見	受号師全吉和尚 寛永 二五年 嗣法師同和尚 三月廿九日
太源派 四千六百五十一世秀恕和尚 長松院	受号師秀養和尚 遠州之 寛永拾九壬暦二月念八日 嗣法師宋養和尚 住僧也
太源派 五千百廿二世全察和尚 西光寺	受号師然室和尚 江州之 寛永廿一甲暦二月十八日 嗣法師存榮和尚 住僧也
太源派 四千七百三十七世賞盛和尚 曹澤寺	受業師觀州和尚 駿州之人 寛永拾三暦三月念二日 嗣法師同 之事
太源派 四千貳百五十八世玄撮和尚 真珠院	

如仲派内
物外派

明曆三丁酉八月十五日
遠州堀越海藏寺一山聞宿住
到同四年

太源派 永平寺
四千八百十七世聞宿和尚
海藏寺

受号師嚴宿和尚 遠州之
正保二乙酉年八月二日
嗣法師存智和尚 住僧也

梅山派内
直請
太初派

万治元戊戌八月十五日
奥州三春天澤寺〔二安〕徐麟住
到二年

如仲派内
太〔大〕輝派

萬治二己亥八月十五日
遠州原野谷最福寺〔白峰〕宋太住
到三年

太源派
四千七百六十二世宋太和尙
永泉寺

受号師宋澤
寛永廿一甲申八月十一日 遠州
嗣法師同 住僧

〔後筆〕

奥州岩城東禪寺澤山
輪住此時當院就于殿堂
造立代金出之而以充一

萬治三庚子八月十五日
正覺寺林泰 興禪寺林宅
能州

監寺勤

回住職之功依之
從門中補住之者矣

正福寺林芳 長泉寺林祝
到同四年

喜山派内
宗芝派

寛文元辛丑八月十五日
武州野原文殊寺的枝悦傳住
到二年

太源派 永平寺
五千三百四十九世悦傳和尚
文殊寺

受号師恕悦和尚 武州之
慶安三庚曆九月八日
嗣法師斧山和尚 住僧也

了堂派内
直請
太容派

寛文二壬寅八月十五日
丹州新江龍穩寺月心林氏住
到三年

總持寺五院の成立と展開

如仲派内 真岩派	寬文三癸卯八月十五日 下総國廣徳寺州鐸	住		
梅山派内 直請 太初派	寬文四甲辰八月十五日 羽州善法寺〔陽室〕清學 寶	住	太源派 五千九百六十世清學和尚 永鷲寺	受号師春學和尚 羽州之 承應三年五月十五日 嗣法師及達和尚 住僧也
如仲派内 大洞院代 不琢派	寬文五乙巳八月十五日 信州真法寺玖全	住	太源派 四千九百四十世玖全和尚 真法寺	受号師壽鑑和尚 信州高升郡 正保四丁亥曆三月七日 嗣法師龍谷和尚 同国
了堂派内 直請 竹窓派	寬文六丙午八月十五日 飛州雲龍寺三浦	住		
如仲派内 石叟派	寬文七丁未八月十五日 駿州大正寺萬國〔魯春〕	住	太源派 七千五百九十七世萬國和尚 大正寺	受号師惠久和尚 遠州之 寬文八戊申歲七月廿日 嗣法師順慶和尚 住僧也
梅山派内 直請 太初派	寬文八戊申八月十五日 加州金澤玉龍寺豫堂〔嬾悅〕住	住		
梅山派内 物外派	寬文九己酉八月十五日 羽州長井瑞龍院〔樂峰〕全賀住 到十年	住		

了堂派
直請
寬文十_三庚戌八月十五_日
出羽國酒田天照寺(萬善)一室住
到十二年

梅山派内
大輝派
寬文十一_辛亥八月十五_日
遠州原野谷長福寺輪嶽関浦住
到十二年

了堂派内
直請
竹窓派
寬文十二_壬子八月十五_日
和州宇多悟真寺名代伊賀天照寺迎禪住
到十二年

梅山派内
喜山派
延寶元_癸丑年八月十五_日
遠州三倉榮泉寺綴山元補_(墨印)
到同二年當開山三百五十年忌退院

梅山派内
直請
太初派
延寶二_甲寅八月仲五_日
奥州岩城龍門寺醫眼關良_(墨印)
到同三卯年

梅山派内
真巖派
延寶三_乙卯曆八月十五_日
遠州城飼洞月院年州梵祝住
到同四年

了堂派内
直請
太容派
延寶四_丙辰曆八月十五_日
備中國長谷法泉寺傑州梵英_(墨)(花押)
到同五年

太源派
八千九世関浦和尚
長福寺
受号師関龍和尚 遠州之
寬文十二_壬子曆正月十一_日
嗣法師靈天和尚 住僧也

太源派
七千百三十九世迎禪和尚
天照寺
受号師文迎和尚 伊州之
寬文四_甲辰年八月三_日
嗣法師天生和尚 住僧也

太源派
六千三百五十五世元補和尚
宥泉寺
受号師関宿和尚 遠州之
明曆四_戊戌年四月五_日
嗣法師天州和尚 住僧也

梅山派内
不琢派

延寶五丁巳曆八月十五日
奥州仙臺雄山寺角尖三龍○
到同六年

太源派
八千百二十世三龍和尚
當行寺

受号師 徹州和尚 奥州之
寛文十二丁曆九月廿八日
嗣法師 全椿和尚 住僧也

梅山派内
直請
太初派

延寶六戌午曆八月十五日
奥州二本松龍泉寺項國快山○
到同七年

太源派
七千五百四十世快山和尚
大泉寺

受号師 達山和尚 奥州之
寛文七丁曆九月廿四日
嗣法師 首榮和尚 住僧也

(表紙張外題)

普藏院住番蝶二

折本装 35・0×19・5 cm

※落款が法名上にある場合は下にし〔朱印〕とした。

梅山派下
如仲派内
大洞院代住
石叟派

延寶七己未八月十五日
遠州川根三光寺〔無參〕素禪○
到同八年

梅山派内
直請
太初派

延寶八庚申曆八月十五日
奥州相馬同慶寺雷峰普音○
到同九年

恕仲派内
大洞院代住
物外派

延寶九辛酉歳八月十五日
信州伊那泉龍院峯國〔本龍〕○
到天和二年

太初派
如幻派

天和貳歲壬戌八月十五日
相州遠藤寶泉寺一燈通國 ☐ ☐ (墨印)
到同三載

太源派
九千二百五十五世通國和尚
寶泉寺
受業師天室和尚 相州之
天和二戌八月九日 住僧也
嗣法師龍澤和尚

恕仲派內
大洞院代住
大輝派

天和三癸亥八月十五日
紀州和歌山窓譽寺門巖(傳正)住
到貞享元年子年

太源派
九千三百八十三世伝正和尚
窓亨寺
受業師嫩諸和尚 紀州之
天和三癸亥曆八月十四日
嗣法師伝方和尚 住僧也

梅山派內
直請
太初派

貞享元年甲子歲八月十五日
羽州油利龍門寺中川愚傳住
到貞享二乙丑年

梅山派之內
如中徒
喜山之孫

貞享二乙丑年八月十五日
三河州天桂院了山長哲住 ☐ ☐ (朱印)
到貞享三丙寅秋

太源派
六千七百廿四世長哲和尚
天桂院
受号師鯨鷲和尚 三州之
萬治四辛丑曆一月廿日
嗣法師恩胡和尚 住僧也

了堂派內
直請
太容之孫

貞享三丙寅歲八月十五日
丹波州園邊德雲寺東海恵林住 ☐ ☐ (朱印)
到貞享四丁卯秋

太源派
九千九百七十九世英勤和尚
東漸寺
受業師膳蕙和尚 三州之
貞享四丁卯曆八月九日
嗣法師蕙嶺和尚 住僧也

梅山派內
大洞院代住
如仲派

貞享四丁卯年八月十五日
三河州伊奈東漸寺泰岩英勤住 ☐ ☐ (朱印)
到貞享五戊辰仲秋

太源派
九千九百七十二世俊貞和尚
慶田寺
受業師慶貞和尚 大和州
貞享五戊辰曆八月十日
嗣法師慈室和尚 住僧也

了堂派內
直請
奇叟派

貞享五戊辰八月十五日
和州三輪慶田寺利徹俊貞 ☐ ☐ (朱印)
到元祿二己仲秋中旬

太源派
一万一百十二世俊貞和尚
慶田寺
受業師慶貞和尚 大和州
貞享五戊辰曆八月十日
嗣法師慈室和尚 住僧也

總持寺五院の成立と展開

太源派内
梅山派

元祿二己巳歲八月十五日
越後村上耕雲寺孤堂全岑住□□
到元祿三庚午仲秋中旬

如仲派内
不琢派

元祿三庚午歲八月十五日
遠州中田雲林寺香悉堯聞住□□
到元祿四辛未仲秋中旬

了堂派内
直請
竹窓派

元祿四辛未八月十五日
江州今津曹澤寺幽溪絶聞住□□
到元祿五壬申仲秋中旬

梅山派内
直請
傑堂派

元祿五壬申仲秋十五日
越後國慈光寺不著傳心住○
到元祿六癸酉仲秋中旬

梅山派下
大洞院代住
石叟門派

從元祿六癸酉仲秋中旬
遠州瑞雲院授峯國傳住□□
同到七年

了堂派下
直請
太谷門葉

乙亥二月梅嶺遷化也法孫大達臯道
自元祿七甲戌補充住職矣
丹波新江龍穩寺梅嶺春芳住□□
同到八年

梅山派内
傑堂派

從元祿八乙亥
越後國種月寺古月秀萬住□□
同到九年

太源派
七千六百六十二世全岑和尚
受号師全鎖和尚 越後之
寛文九己巳天四月十七日
副法師雲藝和尚 住僧也

太源派
八千八百六十八世堯聞和尚
受業師堯撞和尚 遠州之
延宝七己曆一月廿六日
副法師堯嘉和尚 住僧也

太源派
一万六百八世絶聞和尚
受業師賞盛和尚 近江州之
元祿四辛未曆八月十二日
副法師存良和尚 住僧也

太源派
一万七百七十一世不著和尚
受業師傳應和尚 越後州
元祿五壬申曆八月八日
副法師了峯和尚 住僧也

太源派
一万一千一百七十四世梅嶺和尚
受業師鐵船和尚 丹波之
元祿七甲戌曆八月九日
副法師忠峯和尚 住僧也

太源派
九千六百三十五世秀萬和尚
受業師秀悅和尚 越後之
貞享二乙丑曆六月十五日
副法師天察和尚 住僧也

梅山派内
大洞院代住
恕仲派

從元祿九丙子年
羽州瑞龍院貴峰壽尊住○
同到十年

梅山派下
直請
太初派

從元祿拾丁丑中秋
加州玉龍寺大春慧廣住□
同到十一戌寅仲秋

梅山下
傑堂派

從元祿十一戊寅仲秋
越州東福院空外觀心住□
同到十二己卯仲穰中旬

如仲派下
大洞院代住
大輝派

從元祿十二己卯仲秋
遠州柴圓明寺然叟衣天住□
同到十三庚辰仲秋中旬

梅山派内
直請
大(太)初派

從元祿十三庚辰八月十五
羽州善寶寺弘道慧遠住□○
同到十四辛巳仲秋十五

梅山下
傑堂派

從元祿十四巳八月
奥州會津天寧寺〔嬾樹〕木翁住
到來十五年八月十五

如仲下
大洞院代住
喜山派

從元祿十五年八月十五日
駿州慈悲尾増善寺大義象方住□
到來之八月十有五日

太源派
一万一千五百三十六世太春和尚
玉龍寺

受業師嶺室和尚
加州之
元祿十丁丑曆八月十日
嗣法師豫堂和尚
住僧也

太源派
一万五百九十二世觀心和尚
大雄寺

受業師賢陽和尚
越後之
元祿四辛未曆五月廿五日
嗣法師良牛和尚
住僧也

太源派
一万一千八百四十一世衣天和尚
圓明寺

受業師長衣和尚
遠州之
元祿十二己卯曆八月九日
嗣法師周薰和尚
住僧也

太源派
一万二千二百卅四世木翁和尚
天寧寺

受業師華翁和尚
奥州之
元祿十四辛巳曆八月十日
嗣法師孤堂和尚
住僧也

太源派
一万二千四百九世大義和尚
増善寺

受業師長頓和尚
駿州之
元祿十五壬午曆八月十日
嗣法師得岩和尚
住僧也

大(太)初派
直請

元祿十六癸未八月十五日
奥州岩城平下荒川龍門寺真柱祖燈住(朱印)
寶永元年甲申八月十五日退

梅山下
傑堂派

從寶永元年甲申八月十五日
羽州玉川寺一峯儀線住(朱印)
到酉之八月十五日

梅山派下
大洞院代住
眞巖派

從寶永二乙酉八月望住
遠州岡邑河東天龍山聖壽寺寂照月湛(朱印)
全翌年八月一十又五發退

梅山派下
直請
太初派

從寶永三丙戌望住 金澤年礼(朱印)
奥州二春天澤寺高室麟堂(朱印)
全翌年八月十五日退 諸寺院也

梅山下
耕雲寺代住
傑堂派

從寶永四丁亥八月十五日
奥州仙臺輪王寺安州玄貞(朱印)
到全五戊子仲秋望日

梅山下
直請
太初派

自寶永五年戊子八月之望
文章院將軍宣下之御禮西ノ丸ニテ相勤四月發足六月歸山
奥州相馬同慶寺德林自覺(朱印)
至六年己丑穰

了堂派下
直請
竹窓派

自寶永六己丑八月之望
和州宇陀郡自明村悟真寺(不闕)光圓
至七年庚寅八月十五日

大源派
一万二千五百二十七世祖燈和尚
龍源寺

受業師超外和尚 奥州之
元祿十六癸未曆五月三日
嗣法師千懷和尚 住僧也

大源派
一万二千九百十八世寂照和尚
同派聖壽寺

受業師白州和尚 遠州之
寶永二乙酉年八月十一日
嗣法師大運和尚 住僧也

大源派
一万二千五百八十六世麟堂和尚
全應寺

受業師徐麟和尚 奥州之
元祿戊寅十一月廿九日 住僧也
嗣法師同和尚

大源派
一万三千三百三十五世安州和尚
輪王寺

受業師節堂和尚 奥州之
寶永四丁亥歲八月十三日 住僧也
嗣法師已合和尚

大源派
一万三千四百八十九世德林和尚
同慶寺

受業師獨菴和尚 奥州之
寶永五戊子年八月十四日 住僧也
嗣法師伯雄和尚

大源派
一万二千二百四十一世光圓和尚
悟真寺

受業師慧光和尚 和州之
寶永四丁亥歲三月廿八日 住僧也
嗣法師萬機和尚

如仲派之内

從享保二丁酉八月十五日
金沢大守江
年礼相勤

大洞院代住

遠州原野谷最福寺大鱗巽鯨

大輝派

到同曆戊戌八月十五日

朱印

梅山派内

從享保三戊戌八月十五日
羽州庄内領酒田天正寺山宥禪崖

直請

到同曆己亥八月十五日

朱印

如仲派

裏山派

從享保四己亥八月十五日

直請

越後州村上耕雲寺秀邦祖英住

太源派

到同曆五庚子八月十五日

朱印

如仲派之内

從享保五庚子八月十五日

大洞院代住

尾州大草福嚴寺大梁春英

喜山派

到同曆六辛丑八月十五日

朱印

梅山派内

從享保六辛丑八月十五日

直請

奥州二本松龍泉寺玉潤快石

大(太)初派

到同七壬寅八月十五日

朱印

梅山派

從享保七壬寅八月十五日

直請

越後州慈光寺蒙山靈泉

傑堂

到同八癸卯八月十五日

朱印

如仲派下

從享保八癸卯八月十五日

大洞院代住

遠江州平川青龍院大健是恩

真巖派

到同九甲辰八月十五日

朱印
(花押)

太源派

一万六千六百六十世巽鯨和尚

西光寺

受業師則傳和尚 遠州之

元禄五壬申曆二月廿七日

嗣法師英巽和尚 住僧也

太源派

一万六千六百六十二世祖英和尚

耕雲寺

受業師大能和尚 越後之

享保四己亥年八月十二日

嗣法師梅應和尚 住僧也

太源派

一万六千六百十八世春英和尚

福嚴寺

受業師祖傳和尚 石州之

享保五年庚子八月十日

嗣法師祖傳和尚 住僧也

太源派

再公文

一万六千二百三十五世快石和尚

龍泉寺

受業師快山和尚 奥州之

享保六辛丑年八月十一日

嗣法師恕天和和尚 住僧也

太源派

一万三千九百五十八世靈泉和尚

福昌寺

受業師天寧和尚 越後之

寶永八辛卯載三月初九日

嗣法師普周和尚 住僧也

梅山派内

直請

太初派

從享保九甲辰八月十五日

奥州岩城東禪寺珠光智融

到同十二乙巳八月十五日

□ (朱印)

梅山派内

耕雲寺代住

傑堂派

從享保十二乙巳八月十五日

越後國種月寺洞水全明住

到同十一丙午八月十五日

□ (花押)

如仲派内

大洞院代住

不琢派

享保十一丙午

奥州福嶋常光寺古巖德錐 (花押)

八月十五日入院

了堂派

直請

太容末

享保十二丁未年

丹州園部德雲寺了山珣明 (花押)

八月十五日入院

□ (朱印)

梅山派内

慈光寺代住

傑堂派

從享保十三戊申歲八月十五日

越後國雲洞庵道屋梵仙 (花押)

到同十四己酉八月十五有五

□ (朱印)

如仲下

大洞院代住

石叟派

自享保十四己酉八月十五日

駿州富士成安寺大洋道龜

全至十五戊戌八月望日

□ (朱印)

了堂下

直請

太容派

自享保十五秋至十六年亥八月十五日住

丹波州新江龍穩寺乾道一運

以本山再住之功暇先師乾萬慧元和尚則建置牌

○ (朱印)

太源派

一萬六千四十二世智融和尚

長福寺

受業師如幻和尚

享保四己亥年四月廿二日

嗣法師惠峯和尚 住僧也

太源派

一萬六千八百九十五世全明和尚

種月寺

受業師吉音和尚

享保十二己年八月九日

嗣法師秀萬和尚 住僧也

太源派

一萬七千五十八世古巖和尚

再公文 常光寺

受業師得安和尚

享保十一丙午年八月七日

嗣法師道光和尚 住僧也

太源派

一萬六千四百八十八世大洋和尚

成安寺

受業師得應和尚

享保八癸卯年四月廿二日

嗣法師祖龍和尚 住僧也

梅山下
耕雲寺代住
傑堂派
越之後州東福院普應慈觀住
自享保十六辛亥載八月十五日
同到十七壬子歲八月望日
□ (朱印)

梅山下
大洞院代住
恕仲派
羽州米澤瑞龍院大牛慈白住
從享保十七壬子仲秋望日
到同十八癸丑仲秋望日
□ (朱印)

梅山下
直請
太初派
加州金澤玉龍寺大菴〔柏〕庭住
從享保十八癸丑仲秋望日
到同十九甲寅仲秋望日

梅山下
慈光寺代住
傑堂派
奥州白川松林寺玄亮字關住
享保十九甲寅仲秋十五日
到同二十乙卯仲秋十五日
□ (朱印) □ (朱印)

梅山下
大洞院代住
大輝派
遠州倉真邑世樂院癡外宗愚住
從享保廿乙卯仲秋望日。金澤年禮勤之
到同元文元丙辰仲秋望日。同諸山廻登
(花押)

了堂派下
直請
竹窓派
江州今津曹澤寺〔穆心〕自謙
從元文元丙辰年仲秋望日
到元文二丁巳仲秋望日

梅山下
耕雲寺代住
傑堂派
奥州會津天寧寺光外重圓
從元文二丁巳仲秋望日。金澤年禮勤之
到元文三戊午仲秋望日
□ (朱印) □ (朱印)

太源派 再公文
一万七千九百六十一世普應和尚
東福院
受業師空外和尚
享保十六辛亥年八月七日
肥後之
嗣法師戒光和尚
住僧也

太源派
一万八千六百二十世玄亮和尚
松林寺
受業師全鼎和尚
享保十九甲寅年八月九日
奥州之
嗣法師林堂和尚
住僧也

太源派
一万九千二百二世自謙和尚
曹澤寺
受業師榮源和尚
元文元丙辰年八月七日
江州之
嗣法師国音和尚
住僧也

太源派
一万五千二百五十六世重圓和尚
紫雲寺
受業師秀圓和尚
正徳六丙申年三月十日
奥州之
嗣法師琅康和尚
住僧也

梅山派下

大洞院代住
喜山派

了堂派内

直請
竒叟派

慈光寺代住
梅山下
傑堂派

大洞院代住

梅山下
真巖派

太初派下
直請
如幻派

太源派内
耕雲寺代住
梅山派

恕仲派内
大洞院代住
不琢派

從元文三戊午仲秋望日

遠州牛淵極樂寺〔宗瑞〕石芝〔花押〕
到元文四己未仲秋望日

從元文四己未仲秋望日到同年庚申仲秋望日〔花押〕

和州三輪慶田寺〔斗山〕渭北〔朱印〕

從元文五庚申仲秋望日
越後村松安養寺智舟道乘
到寛保元辛酉仲秋望日〔朱印〕

從寛保元辛酉八月十五日〔朱印〕
豐後杵築宗玄寺維道德貞〔朱印〕
至同二年壬戌八月十五日〔朱印〕〔花押〕

從寛保二壬戌八月十五日
相州橘澤松岩寺嶺堂麟鳳
到同三年癸亥八月十五日

從寛保三癸亥八月十五日
羽州國見玉川寺龍睡是穩
延享元甲子八月十五日〔朱印〕

延享元甲子八月十五日
三州黒瀬周昌院〔壯山〕泰禪〔花押〕
延享二乙丑八月十五日退院

太源派

一万九千八百四十三世渭北和尚
再公文 慶田寺

太源派
一万八千六百四十二世智舟和尚
安養寺

太源派
一万八千六百四十世德貞和尚
宗玄寺

太源派
一万五千七百四十二世麟鳳和尚
長泉寺

太源派
一万八千五百六十世泰禪和尚
高道寺

受業師泰忍和尚 三州之
享保十九甲寅年四月十八日
嗣法師丹光和尚 住僧也

受業師孝舜和尚 和州之
元文四己未年八月十二日

嗣法師岱雲和尚 住僧也

受業師仏山和尚 越後之
享保二十乙卯年二月十五日
嗣法師脱錫和尚 住僧也

受業師德禪和尚 豊後之
享保十九甲寅年十月十四日
嗣法師禪關和尚 住僧也

受業師雪嶺和尚 相州之
享保三戊戌年三月四日
嗣法師雪嶺和尚 住僧也

梅山派内
直請
太初派

從延享二乙丑八月十五日
奥州磐城龍門寺惠光智照
至同二年丙寅八月十五日 □□(朱印)

梅山下
慈光寺代住
傑堂派

從延享三年丙寅八月十五日
越後新津正法寺靈源洞水(花押)
至同四年丁卯八月十五日 □(朱印)

梅山下
大洞院代住
如仲派

從延享四丁卯八月十五日
遠州飯田崇信寺鐵翁盤柱□(朱印)(花押)
至同五年戊辰八月十五日 金澤大守
大應公一周忌調經勤

太源派
直請

從寛延元戊辰八月十五日
羽州庄内善寶寺要津喝禪(花押)
至同二年己巳八月十五日 □(朱印)

梅山下
元米難耕雲寺
代住依願此後ヨリ
請疏ハ直ニ遺ス
傑堂派

從寛延二己巳八月十五日
奥州仙臺輪王寺廓然卓宗(花押)
至同二年庚午八月十五日 □□(朱印)

梅山下
大洞院代住
物外派

從寛延三年庚午八月十五日
遠州勾坂郷増參寺(海照)賢外(花押)
至同四年辛未八月十五日 □□(朱印)

梅山派内
直請
太初派

從寶曆元辛未八月十五日
奥州相馬同慶寺密巖覺嚴○(朱印)
至同二年壬申八月十五日 □(朱印)

太源派
一万四千五十一世盤柱和尚
受業師威山和尚 遠州之
正徳元年辛卯八月初六日
嗣法師威山和尚 住僧也
藏泉庵

太源派
一万六千五百九十五世賢外和尚
受業師州外和尚 遠州之
享保九甲辰年三月十一日
嗣法師大遷和尚 住僧也
正林寺

太源派
一万六千二百五十三世覺嚴和尚
受業師德林和尚 奥州之
享保六辛丑年八月晦日
嗣法師德林和尚 住僧也
松沢院

梅山派
傑堂

從寶曆一壬申八月
越後州慈光寺衡田祖量^{〔朱印〕}
至同三年癸酉八月十五日

恕仲派下

大輝派

大洞院代住

從寶曆三癸酉八月至同四甲戌八月十五日
紀州若山窓譽寺益之萬宇^{〔朱印〕}

梅山派内

直請

太初派

從寶曆四甲戌八月
羽州油利龍門寺義天泰存^{〔朱印〕}

至全五乙亥八月十五日^{〔朱印〕}

傑堂派

耕雲寺代住

寶曆五乙亥之穉進院自丙子之秋退院
奥州仙臺松音寺日洲慧旭^{〔朱印〕}

如仲派下

大洞院代住

喜山派

從寶曆六丙子秋
三州田原靈岩寺大寂道智^{〔花押〕}
到同七丁丑秋

梅山派下

直請

大(太)初派

從寶曆七丁丑望住 金澤登城
奥州三春天澤寺即山重觀^{〔朱印〕}
同八年戊寅八月十五日退^{〔朱印〕}

梅山派下

慈光寺代住

傑堂派

從寶曆八戊寅仲秋望
越後州雲洞庵騰海丹龍^{〔朱印〕}
到同九年八月十五日贊^{〔朱印〕}

太源派 再公文

二万二千六百六十五世衡田和尚

慈光寺

受業師東海和尚 越後之
寶曆二壬申年八月九日
嗣法師面山和尚 住僧也

太源派 再公文

二万二千九百七十一世益之和尚

窓譽寺

受業師雪心和尚 紀州之
寶曆三癸酉年八月十一日
嗣法師雪心和尚 住僧也

太源派 再公文

二万二千五百二世大寂和尚

靈岩寺

受業師定慧和尚 三州之
寶曆六丙子年八月七日
嗣法師吉州和尚 住僧也

再公文 太源派

二万三千七百廿七世重觀和尚

天澤寺

受業師重天和和尚 奥州之
寶曆七丁丑八月十一日
嗣法師靈海和尚 住僧也

太源派

一万九千五百七十八世丹龍和尚

天昌寺

受業師雲照和尚 越後之
元文三戊午年六月六日
嗣法師講鎮和尚 住僧也

如仲派下
大洞院代住
眞巖派

從寶曆九己卯秋望旦
尾州常滑天澤院越堂禪海
到同十季八月十五鳥 □□ (朱印)

了堂派
直請
竹窓派

從寶曆十庚辰八月
和州宇陀郡悟真寺娘袴僧斐
同到十一歲辛巳八月十五日 □□ (朱印)

梅山下
耕雲寺代住
傑堂派

從寶曆十一年辛巳八月望日
常州水戸佐竹耕山寺義謙心讓 (花押)
到同十二年壬午八月十五日 □ (朱印) □ (朱印)

如仲派下
大洞院代住
不琢派

從寶曆十二壬午八月望日 於越中高岡加州太守
信州山田眞法寺斷海梁橋 (花押) 瑞龍院殿百五十年忌諷經勳
到同十三癸未八月十五日退院 □□ (朱印)

梅山派内
直請
太初派

從寶曆十三癸未年八月十五日
奥州二本松龍泉寺戒嚴道光 □□ (朱印) (花押)
到明和元年甲申年八月十五日

梅山下
慈光寺代住
傑堂派

從明和元年甲申年八月十五日
越後國川瀬願成寺秀天玉峰
到同十二乙酉年八月十五日 □□ (朱印)

梅山下
大洞院代住
如仲派

從明和十二乙酉八月望日 金沢年礼勲之
駿州梅谷眞珠院玉鳳長瑞住
到翌年丙戌仲秋十五日同諸山廻登

太源派 再公文
二万四千四百十八世僧斐和尚
悟真寺

受業師東溪和尚 大和之
寶曆十庚辰八月八日
嗣法師崑山和尚 住僧也

太源派
一萬八千九百七十九世梁橋和尚
國昌寺

受業師來中和尚 信州之
享保廿一丙辰年三月十七日
嗣法師元海和尚 住僧也

太源派
二万五千二百八十三世玉峰和尚
再公文 願成寺

受業師逆流和尚 越後之
明和元年甲申年八月十三日
嗣法師丹山和尚 住僧也

太源派
一万九千三百九十二世長瑞和尚
圓福寺

受業師龍角和尚 駿州之
元文三戊午年二月廿三日
嗣法師龍角和尚 住僧也

大(太)初派下

直請
如幻派

從明和三丙戌八月望日
相州遠藤寶泉寺大梁宗海住(花押)
到同年丁亥八月十五日退院 □ (朱印)

太源派之内

直請
梅山派

從明和四丁亥八月望日
越後村上耕雲寺大柱東宜
到同戊子八月望日

梅山下

大洞院代住
恕仲派

明和五戊子從仲秋望日 四月十二日於宝四寺
羽州米澤瑞龍院光嶽取瑞 □ □
到明和六己丑仲秋望日 (朱印)

了堂派

直請

從明和六己丑秋八月望日
飛彈國高山雲龍寺鳳林嶺齋(花押)
到同七年庚寅八月十五日

梅山下傑堂派

慈光寺代住

從明和七年庚寅八月 太源和尚四百年
越後州森町長禪寺說洌默宗 □ (朱印)
到同八年辛卯八月中五 之大忌相勤

梅山下

大洞代住
大輝派

從明和八年辛卯八月望日 於金澤野町玉泉寺
遠江州原野谷長福寺〔英門〕豪山 □ □ (朱印)
到同九年壬辰八月中五 玉泉院殿百
二十回忌諷經相勤 二月廿三日

梅山下

直請
太初派

從安永元壬辰仲秋望日
加州金澤玉龍寺大音梵牛 □ (朱印)
到同二癸巳仲秋望日

太源派

二万五千九百五十八世東宜和尚
再公文 耕雲寺

太源派

一萬八千六百七十七世珉瑞和尚
蓬林寺

太源派

二万六千三百五十六世嶺齋和尚
再公文 雲龍寺

太源派

二万四千五百十九世默宗和尚
天德寺

太源派

二萬四千六百六十世豪山和尚
龍德寺

太源派

二万六千八百七十五世梵牛和尚
再公文 玉龍寺

受業師同光和尚 越後之
明和四丁亥年八月八日

嗣法師泰州和尚 住僧也

受業師粹岩和尚 羽州之
享保二十乙卯年三月七日

嗣法師粹岩和尚 住僧也

受業師如實和尚 飛州之
明和六己丑年八月六日

嗣法師如實和尚 住僧也

受業師儀鳳和尚 越後之
寶曆十一辛巳年三月晦日

嗣法師禪豐和尚 住僧也

受業師寂湯和尚 遠州之
寶曆十二壬午年三月六日

嗣法師宗外和尚 住僧也

受業師梵光和尚 加州之
明和九壬辰年八月九日

嗣法師梵光和尚 住僧也

傑堂派
耕雲代住
南英派

從安永二癸巳種八月十五日
越後州赤塚大慈寺大應牧仙 ☐ (朱印)
到安永三甲午秋八月十五日

梅山下

從安永三甲午秋八月十五日
遠州上土方華嚴院晦堂獨明 ☐ (朱印)

大洞院代住
喜山派

從安永四乙未秋八月十五日
到安永四乙未秋八月十五日

梅山下

從安永四乙未秋八月十五日
奧州岩城東禪寺普照惠燈 ☐ (朱印)

直請
大(太)初派

到安永五丙申秋八月十五日

梅山下

從安永五丙申秋八月十五日
越後國橋田吉祥寺闍玄(芳國) ☐ (朱印)

慈光寺代住
傑堂派

到安永六丁酉秋八月十五日

梅山下
真巖派

從安永六丁酉秋八月十五日
遠州奥野長松院德巖(鳳健) ☐ (朱印)

了堂派
直請

從安永七戊戌年八月十五日
丹波州園部德雲寺(緣山)法隨 ☐ (朱印)
至安永八己亥年八月十五日

梅山下

從安永八己亥年八月十五日
越后東福院南嶺普泉住 ☐ (朱印)
到安永九庚子年八月十五日

耕雲寺代住
傑堂派

從安永八己亥年八月十五日
金沢大守公
年禮相勤 ☐ (朱印)

通幻派

二万三千七百十五世牧仙和尚
大慈寺
受業師寿提和尚 越後之
宝曆七丁丑年六月六日
嗣法師寿提和尚 住僧也

太源派

二万七千二百四十六世獨明和尚
再公文 華嚴院
受業師獨行和尚 遠州之
安永三甲午年八月五日
嗣法師獨行和尚 住僧也

太源派

二万七千七百六世闍玄和尚
再公文 吉祥寺
受業師俊芳和尚 越后之
安永五丙申八月十一日
嗣法師絶宗和尚 住僧也

太源派

二万四千百廿三世普泉和尚
清月寺
受業師慈觀和尚 越後之
寶曆九己卯年四月廿四日
嗣法師聯苗和尚 住僧也

恕仲派下

大洞院代住

不琢派

從安永九庚子年八月望日
信州山田眞法寺華嶽密嚴
到天明元辛丑年八月十五日
〔朱印〕

了堂派下

丹州龍穩寺上住代

通幻派從天明元辛丑八月十五日
山内芳春院興國寬豐〔朱印〕
別請疏至天明二壬寅八月十五日

梅山派

從天明二壬寅八月十五日
越後州慈光寺天胤道樹
至同三年癸卯八月十五日〔朱印〕

直請

傑堂

梅山下

大洞院代住

石叟派

太源下

從天明四甲辰秋八月十五日
奧州岩城龍門寺香山大積〔朱印〕
到天明五乙巳秋八月十五日

直請

明林派

梅山下
耕雲寺代住

從天明五乙巳八月十五到天明六丙午八月十五日退院
奧州會津天寧寺大器貫道〔花押〕
於寶四寺諷經勤
丙午六月十二日加州仲將公御逝去
六月廿六日出駕

恕仲派下

大洞代住

物外派

從天明六丙午八月十五到天明七丁未八月十五日退院
信州伊那郡泉龍院〔龍山〕泉活〔朱印〕
於寶四寺諷經相勤者也
未五月七日出駕十一日辰ノ上刻泰雲院小祥忌

太源派

二万八千七百五十世天胤和尚

再公文 慈光寺

受業師觀牛和尚 越後之
天明二壬寅年八月八日
嗣法師面山和尚 住僧也

太源派

二万七千三百三十七世觀牛和尚

洞善寺

太源派

二万二千七百七十三世大積和尚

西福寺

受業師大拙和尚 奧州之
寶曆二壬申年八月十七日
嗣法師大拙和尚 住僧也

太源派

二萬三千六百廿四世貫道和尚

真福寺

受業師出辭和尚 奧州之
寶曆七丁丑年三月十四日
嗣法師靈仙和尚 住僧也

太源派

二万六千二百三十六世泉活和尚

鶴足院

受業師英千和尚 信州之
明和六己丑年三月十九日
嗣法師英千和尚 住僧也

了堂派下
直請
竹窓派

從天明七丁未八月十五日
江州高嶋郡今津曹澤〔寺〕〔量外〕寬江〔花押〕
至同戊申八月十五日退院

太源派
二万九千三百九十三世寬江和尚
再公文 曹澤寺
受業師良關和尚 江州之
天明七丁未八月七日
嗣法師圭岩和尚 住僧也

梅山下
慈光寺代住
傑堂派

從天明八戊申八月十五日
越後雲洞庵祥水海雲〔花押〕
至寬政改元酉八月十五日退院□□〔朱印〕

太源派
二万九千五百二十七世祥水和和尚
再公文 雲洞庵
受業師騰海和尚 越後之
天明八戊申年八月九日
嗣法師萬巖和尚 住僧也

恕仲派内
大洞院代住
大輝派

從寬政改元酉八月十五日
遠州原野谷最福寺〔大寬〕素發〔燈〕
至寬政二庚戌八月十五日退院□□〔朱印〕

太源派
三万三百四十三世石鯨和尚
再公文 天正寺
受業師雲巖和尚 羽州之
寬政二庚戌年八月十日
嗣法師泰巖和尚 住僧也

梅山派内
直請
如仲派

從寬政二庚戌八月十五日
羽州庄内酒田天正寺〔大通〕石鯨□□〔朱印〕
至同曆辛亥八月十五日退院

太源派
三万三百四十三世石鯨和尚
再公文 天正寺
受業師雲巖和尚 羽州之
寬政二庚戌年八月十日
嗣法師泰巖和尚 住僧也

梅山下
直請
傑堂派

從寬政三辛亥八月十五日
奥州仙臺輻王寺玉峯曇龍〔花押〕
至同曆四壬子八月望日退院□□〔朱印〕

太源派
三万七百二十五世曇龍和尚
再公文 輪王寺
受業師敬頻和尚 奥州之
寬政三辛亥八月廿一日
嗣法師栢淳和尚 住僧也

恕仲派下
大洞院代住
喜山派

從寬政四壬子八月十五日
濃州長國寺魯山轟道□□〔朱印〕
至同曆五癸丑八月望日退院

太源派
三万千三百三十四世轟道和尚
再公文 長國寺
受業師弘宗和尚 濃州之
寬政四壬子年八月十日
嗣法師大悲和尚 住僧也

太源派
直請
了堂派

從寬政五癸丑八月十五日
石州銀山龍昌寺蒼澤觀龍□□〔朱印〕
至同曆六甲寅仲秋望庚

太源派
二万四千二百七十九世觀龍和尚
再公文 善興寺
受業師元山和尚 石州之
寶曆十庚辰年三月二日
嗣法師元山和尚 住僧也

梅山下

慈光寺代住

傑堂派

從寛政六甲寅八月十五日

奥州白河松林寺一穩聯州

至寛政七乙卯八月十五日退院

太源派 再公文

三万九百十四世聯州和尚

松林寺

受業師金毛和尚 奥州之

寛政六甲寅年八月十一日

嗣法師盛陵和尚 住僧也

恕仲下

大洞院代住

真巖派

從寛政七乙卯八月十五日至同八丙辰八月十五日

信州海埜興善寺巽堂泉隨

國君加州公江年實相勤 □ □ (朱印)

太源派

二万七千七百六十二世泉隨和尚

金嶺寺

受業師慧泉和尚 信州之

安永六丁酉年三月五日

嗣法師慧泉和尚 住僧也

了堂派内

直請

奇叟派

從寛政八丙辰八月十五日

和州三輪慶田寺五雲(道鳳)(花押)

至寛政九丁巳八月十五日 □ (朱印)

太源派

二万九千八百五世五雲和尚

青林寺

受業師大淵和尚 和州之

寛政元己酉四月十三日

嗣法師大淵和尚 住僧也

(表紙張外題)

普藏院輪住誌

33・0×19・4 cm

※落款が法名上にある場合は下にし「(朱印)」とした。

越後

耕雲輪番順

次

耕雲寺

種月寺

東福院

天寧寺

玉泉寺

輪王寺

松音寺

耕山寺

越後

慈光輪番

順次

慈光寺

雲洞庵

松輪寺

安養寺

正法寺

願成寺

長禪寺

吉祥寺

太源派内
耕雲寺代住
梅山派

從寛政九巳年八月十五日
羽州庄内國見玉川寺大兆石翠
至寛政十戌午八月十五日
□(朱印) □(朱印)

太源派
二万九千三百二十七世石翠和尚
受業師翠巖和尚 羽州之
天明七丁未年三月七日
嗣法師俊鳳和尚 住僧也
寶泉寺

太源派
大洞院代

從寛政十戌午八月十五日
奥州信夫郡福嶋常光寺(瑞芳)萬秀 (花押)
至同十二巳未八月十五日
□(朱印)

太源派
二万八千六百九世萬秀和尚
受業師鐵漢和尚 奥州之
天明元辛丑年八月二十二日
嗣法師隆巖和尚 住僧也
東泉寺

太源派
直請

從寛政十一巳未八月十五日
飛州大野郡高山雲龍寺存妙(祖胤)(花押)
至同十二庚申八月十五日
□(朱印)

太源派
二万六千八百六十八世千榮和尚
受業師保牛和尚 越後之
明和九壬辰七月廿四日
嗣法師保牛和尚 住僧也
安養寺

傑堂派
慈光寺代

從寛政十二庚申八月十五日
越後蒲原郡村松安養寺(長遠)千榮 (花押)
至享和元辛酉仲秋十五日
□(朱印)

太源派
二万七千六百十二世元宝和尚
受業師禪助和尚 駿州之
安永二癸巳年八月十五日
嗣法師禪珠和尚 住僧也
大正寺

如仲派
大洞院代

從享和元辛酉八月十五日
駿州有度郡大谷大正寺(佛海)元寶 (花押)
至同二壬戌八月十五日
□(朱印)

太源派
二万七千六百十二世元宝和尚
受業師禪助和尚 駿州之
安永二癸巳年八月十五日
嗣法師禪珠和尚 住僧也
大正寺

太初派
直請

從享和二壬戌八月十五日
奥州安達郡二本松龍泉寺覺翁 (孝海)(花押)
至同三癸亥八月十五日
(花押) (墨印の花押)

太源派
三万四千三百四十六世悦参和尚
受業師瑞龍和尚 奥州之
享和三癸亥年八月九日
嗣法師敬穎和尚 住僧也
再公文 松音寺

梅山派
耕雲寺代

從享和三癸亥八月十五日
奥州仙臺松音寺悦参 (花押)
至文化元甲子八月十五日

太源派
三万四千三百四十六世悦参和尚
受業師瑞龍和尚 奥州之
享和三癸亥年八月九日
嗣法師敬穎和尚 住僧也
再公文 松音寺

恕仲派
大洞院代

從文化元甲子八月十五日
羽州米澤瑞龍院〔梧仙〕林鳳〔花押〕
至文化二乙丑八月十五日

太源派
二万八千二百一十世林鳳和尚
受業師廣圓和尚 羽州之
安永八己亥年三月四日
嗣法師梵林和尚 住僧也
全城院

太初派
直請

從文化二乙丑八月十五日
加州金澤玉龍寺龍穩〔花押〕
至文化三丙寅八月十五日

太源派
三万四千八百二十四世龍穩和尚
受業師素門和尚 加州之
文化二乙丑年八月十三日
再公文 玉龍寺
嗣法師泰門和尚 住僧也

傑堂派
慈光寺代

從文化三丙寅八月十五日
越後新津正法寺祖海〔天岩〕〔花押〕
至文化四丁卯八月十五日

恕仲派
大洞院代

文化四卯年八月十五日ヨリ
遠州柴圓明寺泰靈〔雄三〕〔花押〕
至文化五辰年八月十五日

太源派
直請

文化五辰年八月十五日ヨリ
奥州三春天澤寺〔維石〕俊巖〔花押〕
至文化六巳年八月十五日
□ 〔朱印〕

太源派
三万五千五百六十二世俊巖和尚
受業師悟山和尚 奥州之
文化五戊辰年九月七日
再公文 天澤寺
嗣法師悟山和尚 住僧也

傑堂派
耕雲寺代

文化六巳年八月十五日ヨリ
常州水戸耕山寺瑞堂〔禪鳳〕〔花押〕
至文化七午年八月十五日

恕仲派
大洞院代

文化七午年八月十五日ヨリ
遠州三倉榮泉寺〔温淳〕盤紅○
〔朱印〕
至文化八未年八月十五日

太源派
三万五千九百七十世盤紅和尚
受業師任超和尚 遠州之
文化七庚午年八月八日
再公文 榮泉寺
嗣法師大鷲和尚 住僧也

直請
太源派

文化八辛 壬戌八月十五日 ○□ (朱印)
奥州同慶寺桃源(門龍)(花押)
至文化九壬 申八月十有五日退院

太源派
三万六千五百五十四世桃源和尚
再公文 同慶寺

受業師門牛和尚 奥州之
文化八辛 未八月九日
嗣法師卯之和尚 住僧也

傑堂派
慈光(寺)代

文化九壬 申八月十五日 □□ (朱印)
越後上田雲洞庵道全(花押)
至文化十癸酉八月十五日退院

文化十癸酉八月十五日

智仲派
大洞院代

遠州内田龍登院(鳳嶺)快麟(花押) □□ (朱印)
至文化十一甲戌八月十五日

太源派
三万六千五百四十一世快麟和尚
再公文 龍登院

受業師千中和尚 遠州之
文化十癸酉八月九日
嗣法師千中和尚 住僧也

直請
太源派

文化十一甲戌八月十五日 □□ (朱印)
羽州龍門寺(石門)断橋(花押)
至文化十二乙亥八月十五日

文化十二乙亥年從八月十五日

直請
太源派

越后村上耕雲寺(大嶽)俊喬(花押)
文化十三丙子年從八月十五日
文化十三丙子年八月十五日 □□ (朱印)

太源派
二万九千四百五十八世俊喬和尚
西方寺

受業師大然和尚 越後之
天明八戊申年四月十二日
嗣法師同海和尚 住僧也

大洞院代

文化十三丙子年從八月十五日
仙臺大雄寺圓應(智本)(花押) □□ (朱印)
文化十四丁丑年八月十五日

直請
如幻派

文化十四丁丑年從八月十五日
相州山田德翁寺(真嶺)良諦(花押) □□ (朱印)
文政元戊寅年八月十五日

直請
梅山派

文政元 戊寅年從八月十五日 (朱印)
越後慈光寺〔寿山〕智量□
文政二 己卯年至八月十五日

大洞院代

文政二 己卯年從八月十五日 (朱印)
遠州大居瑞雲院〔大田〕孝本○
文政三 庚辰年至八月十五日

直請
太初派

文政三 庚辰年從八月十五日 (朱印)
奥州磐城東禪寺〔鈍成〕靈瑞□
文政四 辛巳年至八月十五日

種月寺代
大源派
越後

文政四 辛巳年從八月十五日 (朱印)
佐州中原本田寺〔桐林〕俊鳳○
文政五 午年至八月十五日

大洞院代

文政五 午年從八月十五日 (朱印)
遠州見付金剛寺芳運□
文政六 未年至八月十五日

直請
了堂派

文政六 未年從八月十五日 (朱印)
丹波小山德雲寺〔大龍〕活丈○
文政七 申年至八月十五日

傑堂派
慈光寺代

文政七 申年八月十五日ヨリ (朱印)
越後川瀬願成寺朴心〔慧淳〕○
文政八 酉年八月十五日マデ

太源派
三万七百三十二世孝本和尚
陽谷寺
受業師智外和尚 遠州之
寛政三 辛亥年八月廿三日
嗣法師智外和尚 住僧也

太源派
二万九千三百四十三世俊鳳和尚
洞泉寺
受業師敲門和尚 佐州之
天明七 丁未年三月十八日
嗣法師角紋和尚 住僧也

梅山派
大洞院代

文政八乙酉歲八月十五日ヨリ
紀州若山窓譽寺〔中元〕素玉□
文政九丙戌年八月十五日迄

再 太源派
公 三万九千二百六十五世素玉和尚
文 窓譽寺
受業師素道和尚 紀州之
文政八酉年八月十日
嗣法師古珪和尚 住僧也

直請
大源派

文政九丙戌年八月十五日ヨリ
羽州庄内大山善寶寺大令〔宗覺〕〔花押〕
文政十丁亥歲八月十五日迄 □□〔朱印〕

傑堂派
耕雲寺代

文政十亥年八月十五日ヨリ
越後赤田村東福院〔祖峰〕大俊〔花押〕
文政十一戊子八月十五日迄 □〔朱印〕

太源派
三万五千九百九十四世大俊和尚
龍泉寺
受業師大心和和尚 同(越後)州之
文化七庚午年八月二十四日
嗣法師祖輪和尚 住僧也

恕仲派下
大洞院代
喜山派

文政十一戊子八月十五日ヨリ
三州田原城龍門寺〔天俊〕石峯〔花押〕
同十三己丑八月十五マテ ○□〔朱印〕

再 同太源派
公 三万九千九百七世石峰和尚
文 龍門寺
受業師知見和尚 三州之
文政十一戊子年八月十一日
嗣法師智見和尚 住僧也

直請
了堂派

文政十二己丑八月十五日ヨリ
丹波新江龍穩寺〔太瑞〕亘容〔花押〕
同十三庚寅八月十五日マテ □〔朱印〕

再 同太源派
公 三万九千九百七世石峰和尚
文 龍門寺
受業師知見和尚 三州之
文政十一戊子年八月十一日
嗣法師智見和尚 住僧也

傑堂派
慈光寺代

文政十三寅八月十五日ヨリ
越後森町長禪寺〔大練〕素紋〔花押〕
天保二辛卯八月十五日迄 □〔朱印〕

再 同太源派
公 三万九千九百七世石峰和尚
文 龍門寺
受業師知見和尚 三州之
文政十一戊子年八月十一日
嗣法師智見和尚 住僧也

恕中派下
大洞院代
真巖派

天保二辛卯八月十五日ヨリ
三州八幡西明寺〔寛海〕義裕〔花押〕 □〔朱印〕
同三壬辰八月十五日マテ

太源派
四万五百九世義裕和尚
再公文 西明寺
受業師〔空白〕 (空白)
天保二卯年八月六日
嗣法師〔空白〕 住僧也

直請
大源派
石州銀山龍昌寺〔大眠〕逸宗□□〔花押〕
天保三壬辰八月十五日ヨリ
同四癸巳八月十五日マテ

傑堂派
耕雲寺代
奥州會津城天寧寺〔龍山〕秦眠〔花押〕
天保四癸巳從八月十五日
同五甲午至八月十五日 □□〔朱印〕

恕仲派
遠州中田雲林寺〔得方〕便了□□〔朱印〕
天保五甲午八月十五日ヨリ
同六乙未年八月十五日迄

太源派
直請
飛州高山雲龍寺〔胸海〕祖膽〔花押〕
天保六未八月十五日ヨリ
同七申年八月十五日マテ □□〔朱印〕

慈光寺代
傑堂派
越後橋田吉祥寺善遂○〔朱印〕
從天保七申八月十五日
到天保八酉八月十五日

大源派下
大洞院代
遠州河根智滿寺〔潛山〕澤龍〔花押〕○〔朱印〕
從天保八酉同到戌年

直請
太初派
奥州二本松龍泉寺〔梅芳〕玉胤〔花押〕
天保九戌八月十五日ヨリ
同十亥年八月十五日マテ □□〔朱印〕

再 太源派
公 四万千七十二世便了和尚
文 雲林寺
受業師問了和尚 遠州之
天保五午年八月九日
嗣法師 同和尚 住僧也

再 太源派
公 四万千三百三十八世祖膽和尚
文 雲龍寺
受業師峰天和尚〔空白〕
天保六年八月六日
嗣法師 同和尚 住僧也

太源派
四万四千十四世善遂和尚
法幢寺
受業師佛壽和尚 越后之
天保二卯年三月十三日
嗣法師佛壽和尚 住僧也

太源派
三万五千五百六十世澤龍和尚
高傳寺
受業師笑禪和尚 遠州之
文化五戊辰年九月六日
嗣法師笑禪和尚 住僧也

再 太源派
公 四万千七百五十世玉胤和尚
文 龍泉寺
受業師佛果和尚 奥州之
天保九年八月五日
嗣法師 同 住僧也

耕雲寺代
太源派

從天保十年亥八月十五日
羽州庄内玉川寺〔佛母〕元孝□
同十一年子八月十五日退院
(花押)

再 太源派
公 四万九千九百五十世元孝和尚
文 玉泉寺
受業師元龍和尚 羽州之
天保十年八月七日
嗣法師 同 住僧也

恕仲派
大洞院振
瑞龍院代

從天保十一子仲秋
山内芳春院順苗□
翌丑八月交代日マテ

直請
太初派

從天保十二丑仲秋
相州橘沢松岩寺龍堂〔轉珠〕○
翌寅八月交代日マテ

太源派下

從天保十三壬寅八月十五日

再 同(太源派)
公 四万二千六百二十一世賢了和尚
文 慈光寺
受業師一山和尚 同(越後)
天保十三年八月三日
嗣法師覺林和尚 住僧也

直請
傑堂派

翌至癸卯八月交代之日
越後瀧谷慈光寺〔智山〕賢了□

大洞院代

從天保十四癸卯八月十五日
遠州倉真世樂院〔雄千〕逸榮○
翌至甲辰八月交代之日

太源派
四万二千一百十一世逸英和尚
世樂院
受業師逸温和尚 遠州之
天保六年三月二十三日 住僧也
嗣法師祥山和尚

直請
大(太)初派

從弘化元甲辰八月十五日
加州玉龍寺郁翁〔英純〕□
翌巳八月交代之日迄

直請
太源派

從弘化二乙巳年八月十五日
奥州仙臺城輪王寺〔崇明〕雄參□
翌丙午八月交代之日迄

恕仲派下
大洞院代
喜山派

從弘化三丙午八月十五日
駿州坂本林叟院〔祖海〕徹宗

翌丁未八月交代之日迄 □〔朱院〕 □〔朱印〕

直請
太源派

從弘化四丁未八月十五日
羽州酒田天正寺〔百丈〕石獅〔花押〕

翌嘉永元戊申八月交代日迄

太源派
慈光寺代

從嘉永元申年八月十五日〔朱印〕
越後上田雲洞庵百川□

翌二酉年八月十五日迄

恕仲派
大洞院代

嘉永三戌年八月十五日退院之朝
遠州奥野長松院〔天山〕凌雲□〔朱印〕

了堂派下
奇叟派
直請

嘉永三庚戌年八月十五日ヨリ
和州三輪郷芝村慶田寺諦道〔義観〕□〔朱印〕

翌辛亥年八月交代之日

傑堂派

奥州仙臺城下松音寺代住〔龜山〕鶴洲□〔朱印〕
同派法輪寺

嘉永四年秋ヨリ翌年五年秋退院

太源派
大洞院代

三州黒瀬周昌院〔興山〕賢隆□〔朱印〕
從嘉永五年壬子八月十五日翌丑八月交代

再 太源派
公 四万三千五百八十六世徹宗和尚
文 林叟院
受業師活隆和尚 駿州之
弘化二年八月九日
嗣法師 同 住僧也

太源派
三万九千八百十三世石獅和尚
耕福寺
受業師石榮和尚 羽州之
文政十一戊子年三月十三日
嗣法師瑞明和尚 住僧也

再 太源派
公 四万四千三百二十九世凌雲和尚
文 長松院
受業師興雲和尚 遠州之
嘉永二年八月十日
嗣法師海□和尚 住僧也

太源派
四万四千五百九十世諦道和尚
再公文 慶田寺
受業師探玄和尚 大和之
嘉永三年八月七日
嗣法師要玄和尚 住僧也

太源派
四万三千九百八十世鶴洲和尚
法輪寺
受業師脱音和尚 同〔奥州之〕
嘉永元年四月十四日
嗣法師脱連和尚 住僧也

太源派
四万六百七十五世賢隆和尚
松源院
受業師秀岳和尚 三州之
天保二卯年十月七日
嗣法師秀岳和尚 住僧也

太源派

從嘉永六丑八月十五日
奧州相馬同慶寺〔無韻〕民鳳
翌甲寅八月交代

傑堂派

嘉永七甲寅八月十五日
奧州白川松林寺密庵〔古道〕
翌乙卯交代之日

大洞院代
恕仲派下
石叟派

安政二卯年ヨリ同曆三辰年マデ
遠州崇信寺〔少聘〕老龍住
〔朱印〕

直請
太源派

從安政三丙辰八月十五日
奧州三春天澤寺〔滿海〕龍眉
翌丁巳八月十五日交代

傑堂派
耕雲寺代

從安政四丁巳年八月十五日
常州水戸佐竹耕山寺〔大円〕白牛〔花押〕
至同曆五戊午八月十五日交代

大洞院代

〔年月日なし〕
遠州勾坂増參寺〔仏天〕衝宗〔花押〕
〔年月日なし〕

直請
太源派

從安政六己未八月十五日
羽州龜田龍門寺是道〔英苗〕
至萬延元庚申八月十五日

再 太源派

公 四万五千三百五十五世民鳳和尚
文 同慶寺
受業師觀堂和尚 奥州之
嘉永六年八月三日
嗣法師珉貌和尚 住僧也

再 太源派

公 四万五千五百三十七世密庵和尚
文 松林寺
受業師大休和尚 奥州之
嘉永七年八月十一日
嗣法師 同 住僧也

再 太源派

公 四万五千七百四十五世老龍和尚
文 崇信寺
受業師佛果和尚 遠州之
安政二年八月九日
嗣法師石天和和尚 住僧也

同〔太源派〕

四万三千五百十六世龍眉和尚
曹源寺
受業師活岩和尚 奥州之
天保十五年四月二十七日
嗣法師 同 住僧也

再 同太源派

公 四万六千二百六十二世白牛和尚
文 耕山寺
受業師白龍和尚 常州之
安政四年八月七日
嗣法師 同 住僧也

太源派

四万四千四百二十九世衝宗和尚
増參寺
受業師寛嶺和尚 遠州之
嘉永三年二月二十六日
嗣法師 同 住僧也

太源派

瀧谷

慈光寺代

從安政七庚申八月十五日

越後蒲原郡村松安養寺〔石電〕恵光

翌至文久元年辛酉八月十五日退院

□ (朱印)

恕仲派下

大洞院代

大輝派

從文久元年辛酉八月十五日

遠州原野谷最福寺天庵〔文童〕

□ (朱印)

翌至同曆壬戌八月十五日退院

太源派

四万七千四百二十七世天庵和尚

再公文 最福寺

受業師 猷敷和尚 遠州之

文久元年八月十日

嗣法師 錦瑞和尚 住僧也

直請

太源派

文久二壬戌八月望祝蒙

相州遠藤開山如幻宗悟寶泉寺大圓〔祖道〕

□ (朱印)

同二癸亥八月望解印

直請

太源派

自從文久三癸亥至元治改元甲子八月十五日交代

越後村上耕雲寺天然〔道器〕

□ (朱印)

再 太源派

公 四万八千二十一世天然和尚

文 耕雲寺

受業師 密珊和尚 越後之

文久三年八月十日

嗣法師 玉堂和尚 住僧也

喜山派

大洞院代

從元治元年八月十五日

尾州大草福嚴寺〔默外〕道宗

至慶應元丑八月十五日退院

□ (朱印)

太源派

四万四千七百七十四世道宗和尚

龜京寺

受業師 卓成和尚 同〔尾州之〕

嘉永二年三月七日

嗣法師 同 住僧也

直請

太源派

慶應元丑八月十五日ヨリ

奥州檜葉郡折木東禪寺〔東嶽〕擔光

至同寅八月十五日退院

□ (朱印)

慈光寺代

大源派

慶應二年寅八月十五日ヨリ

越後蒲原郡新津邑正法寺幸善〔梅翁〕

至同三年卯八月十五日退院

□ (朱印)

太源派

四万四千四百九十二世幸善和尚

觀音寺

受業師 梅重和尚 同〔越后之〕

天保七年五月廿六日

嗣法師 同和尚 住僧也

大源派下
大洞院代
真巖派

直請
了堂派

種月寺代
大源派

慶應三卯八月十五日ヨリ 五十八歳
遠州野部邑天龍院〔朴應〕孔淳
至同四辰八月十五日退院一老職□□（朱印）

從慶應四辰八月十五日 一老職
丹州園部德雲寺龍山〔恵玉〕□□（朱印）
至明治二己八月十五日交代

從明治二己八月十五日 二老職 六十一歳
越后蒲原郡鴻巣村福巖寺〔祖契〕禪翁
至明治三庚午八月十五交退

太源派
四万二千二世孔淳和尚
天龍院

受業師孔龍和尚 遠州之
天保十年九月十一日 住僧也
嗣法師 同

再 太源派
公 四万九千五百八十四世禪翁和尚
文 福巖寺
受業師達禪和尚 越後之
明治二年八月十四日 住僧也
嗣法師 同

普藏院の輪住帳は三帖からなり、第一帖は『普藏院住番帳^き』で、天正十五年（一五八七）から延宝六年（一六七八）まで、第二帖は『普藏院住番帳^き』で、延宝七年から寛政八年（一七九六）まで、第三帖は『普藏院輪住誌』で、寛政九年から明治二年（一八六九）まで記されている。

まずはじめに国別・寺院別・輪住回数・門派名その他をまとめ、便宜的に『御直末・元輪番地寺院名鑑』に準じて列挙すると、つぎのとおりである。

相模

神奈川 徳翁寺 2回

梅山下
太初派 1

如幻派 2

※1の正徳二年は無関法禪が「老躬故徒弟大統来禪勤焉」とある。

神奈川 宝泉寺 6回

太初派内
如幻派 1 2 3 4

太初派下
如幻派 5

太源派 6

神奈川 松岩寺 2回

太初派下
如幻派 1

太初派 2

武蔵

埼玉 文殊寺 1回

喜山派内
宗芝派 1

常陸

茨城 耕山寺 4回

梅山門下
傑堂派 1

梅山下
傑堂派 2

傑堂派 3 4

※1の享保元年、2の宝暦十一年、3の文化六年、4の安政四年、いずれも越後耕雲寺の代住。

下総

千葉 広徳寺 1回

如仲派内
真岩派 1

駿河

静岡 増善寺 1回

如仲下
喜山派 1

※1の元禄十五年は遠江大洞院の代住。

静岡 長光寺 1回

如仲派内
石叟派 1

静岡 大正寺 2回

如仲派内
石叟派 1

如仲派 2

※2の享和元年は遠江大洞院の代住。

静岡 真珠院 3回

梅山派内
如仲派 1

如仲派内
石叟派 2

梅山下
如仲派 3

※2の明暦元年と、3の明和二年は遠江大洞院の代住。また明和二年の玉鳳長瑞には「金沢年礼勤之、同諸山廻登」の記録がある。

静岡 成安寺 1回

如仲下
石叟派 1

※1の享保十四年は遠江大洞院の代住。

静岡 保寿寺 1回

如仲派内
石叟派 1

静岡 永明寺 1回

梅山下
如仲派 1

※1の正徳元年は遠江大洞院の代住。

静岡 林叟院 2回

梅山派内
如仲派 1

如仲派下
喜山派 2

※2の弘化三年は遠江大洞院の代住。

静岡 梅林院 1回

如仲派内
宗芝派 1

遠江

静岡 智満寺 2回

梅山派内
如仲派 1

太源派下 2

※2の天保八年は遠江大洞院の代住。

静岡 三光寺 1回

梅山派下
如仲派内 1

※1の延宝七年は遠江大洞院の代住。

静岡 長松院 3回

如仲派内
石叟派 1

梅山下
真巖派 2

如仲派内
怒仲派 3

※3の嘉永二年は遠江大洞院の代住。

静岡 竜雲寺 1回

梅山派内
如仲派 1

静岡 極楽寺 1回

梅山派下
喜山派 1

※1の元文三年は遠江大洞院の代住。

静岡 竜登院 1回

怒仲派 1

※1の文化十年は遠江大洞院の代住。

静岡 華嚴院 1回

梅山下
喜山派 1

※1の安永三年は遠江大洞院の代住。

静岡 洞月院 1回

梅山派内
真巖派 1

静岡 永江院 1回

如仲派内
真岩派 1

静岡 世楽院 3回

如仲派内
太輝派 1

梅山下
大輝派 2

(空白) 3

※1の正保四年、2の享保二十年、3の天保十四年、いずれも遠

江大洞院の代住。

2の享保二十年癸外宗愚には「金沢年礼勤之」「同諸山廻登」の記録がある。

静岡 長福寺 2回

梅山派内
大輝派 1

梅山下
大輝派 2

※2の明和八年は遠江大洞院の代住。またその時の「英門」豪山

には「於金沢野町玉泉寺」「加州公二代目室玉泉院殿百五十回
忌諷経相勤」(二月廿三日)の注記がある。

静岡 最福寺 5回

如仲派内
大輝派 1 2 3

如仲派内
大輝派 4

太源派 5

※3の享保二年、4の寛政元年、5の文久元年は遠江大洞院の代住。

静岡 善勝寺 1回

梅山下
石叟派 1

※1の天明三年は遠江大洞院の代住。

静岡 青竜院 1回

如仲派下
真巖派 1

※1の享保八年は遠江大洞院の代住。

静岡 竜巢院 1回

如仲派内
逆翁派 1

静岡 円明寺 3回

梅山派内
如仲派 1

如仲派下
大輝派 2

恕仲派 3

※2の元禄十二年、3の文化四年は遠江大洞院の代住。

静岡 聖寿寺 1回

梅山派下
真巖派 1

※1の宝永二年は遠江大洞院の代住。

静岡 正眼院 2回

如仲派内
不琢派 1 2

静岡 増参寺 3回

如仲派内
物外派 1

梅山下
物外派 2

(空白) 3

※1の正保二年、2の寛延三年、3の安政五年はいずれも遠江大洞院の代住。

洞院の代住。

静岡 金剛寺 1回

(空白) 1

※1の文政五年は遠江大洞院の代住。

静岡 天竜院 1回

太源派下
真巖派 1

※1の慶応三年は遠江大洞院の代住。

静岡 瑞雲院 2回

梅山派下
石叟門派 1

(空白) 2

※1の元禄六年、2の文政二年は共に遠江大洞院の代住。

静岡 善住寺 1回

如中派内
喜山派 1

静岡 栄泉寺 2回

梅山派内
喜山派 1

恕仲派 2

※1の延宝元年は「当開山三百五十年忌退院」とある。2の文化

七年は遠江大洞院の代住。なお『御直末・元輪番地寺院名鑑』

では文化七年に大洞院の代住をしている温淳盤紅が享和元年に

も大洞院の代住をしているとあるも、『普蔵院輪住誌』によれ

ば駿州大正寺の仏海元宝が代住している。

静岡 崇信寺 2回

梅山下
如仲派 1

恕仲派下
石叟門派 2

※1の延享四年と2の安政二年は、共に遠江大洞院の代住。また

延享四年鉄翁盤柱に「金沢大守大応公一周忌諷経勤」とある。

静岡 海蔵寺 2回

如仲派内
物外派 12

静岡 雲林寺 4回

如仲派内
不琢派 123

恕仲派 4

静岡 鳳岡寺 1回

梅山派内
如仲派 1

静岡 大洞院 61回

梅山派内
如仲派 1
161

※1の寛永十年は紀州窓響寺、2正保二年は遠州増参寺、3正保

四年遠州世楽院、4明暦元年駿州真珠院、5寛文五年信州真法

寺、6延宝七年遠州三光寺、7延宝九年信州泉竜院、8天和三

年紀州窓響寺、9貞享四年三州東漸寺、10元禄六年遠州瑞雲院、

11元禄九年羽州瑞竜院、12元禄十二年遠州円明寺、13元禄十五

年駿州増善寺、14宝永二年遠州聖寿寺、15正徳元年駿州永明寺、

16正徳四年能州満福寺、17享保二年遠州最福寺、18享保五年尾

州福厳寺、19享保八年遠州青竜院、20享保十一年奥州常光寺、

21享保十四年駿州成安寺、22享保十七年羽州瑞竜院、23享保二

十年遠州世楽院、24元文三年遠州極楽寺、25寛保元年豊後宗玄

尾張

愛知 妙仙寺 1回
如仲派内
 喜山派 1

寺、26延享元年三州周昌院、27延享四年遠州崇信寺、28寛延三年遠州増參寺、29宝曆三年紀州窓響寺、30宝曆六年三州靈巖寺、31宝曆九年尾州天沢院、32宝曆十二年信州真法寺、33明和二年駿州真珠院、34明和五年羽州瑞竜院、35明和八年遠州長福寺、36安永三年遠州華嚴院、37安永九年信州真法寺、38天明三年遠州善勝寺、39天明六年信州泉竜院、40寛政元年遠州最福寺、41寛政四年濃州長国寺、42寛政七年信州興善寺、43寛政十年奥州常光寺、44享和元年駿州大正寺、45文化元年羽州瑞竜院、46文化四年遠州田明寺、47文化七年遠州栄泉寺、48文化十年遠州竜登院、49文化十三年奥州大雄寺、50文政二年遠州瑞雲院、51文政五年遠州金剛寺、52文政八年紀州窓響寺、53文政十一年三州竜門寺、54天保二年三州西明寺、55天保八年遠州智満寺、56天保十一年能州芳春院、57天保十四年遠州世楽院、58弘化三年駿州林叟院、59嘉永二年遠州長松院、60嘉永五年三州周昌院、61安政二年遠州崇信寺、62「安政五年」遠州増參寺、63文久元年遠州最福寺、64元治元年尾州福巖寺、65慶応三年遠州天竜院、いづれも代住。

なお56天保十一年の能州芳春院は振輪番出羽瑞竜院の代住である。また享保二年大鱗異鯨に「金沢大守^江年礼相勸」とある。

愛知 福巖寺 2回

如仲派内
 喜山派 1

喜山派 2

※1の享保五年と2の元治元年は共に遠江大洞院の代住。

愛知 天沢院 1回

如中派下
 真巖派 1

※1の宝曆九年は遠江大洞院の代住。なお、『御直末・元輪番地寺院名鑑』では天沢十五世禅海道悦とあるも『普蔵院住番牒』では越堂禅海とある。

三河

愛知 西明寺 1回

如仲派
 真巖派 1

※1の天保二年は遠江大洞院の代住。

愛知 東漸寺 1回

梅山派内
 如仲派 1

※1の貞享四年は遠江大洞院の代住。

愛知 天桂院 1回
梅山派之内如中徒
 喜山之孫 1

愛知 竜門寺 1回

恕仲派内
喜山派 1

※1の文政十一年は遠江大洞院の代住。

愛知 靈巖寺 1回

如仲派下
喜山派 1

※1の宝暦六年は遠江大洞院の代住。

愛知 周昌院 2回

恕仲派内
不琢派 1

太源派 2

※1の延享元年、2の嘉永五年は共に遠江大洞院の代住。

信濃

長野 真法寺 3回

如仲派
不琢派 1

如仲派下
不琢派 2 3

※1の寛文五年、2の宝暦十二年、3の安永九年は共に遠江大洞院の代住。なお宝暦十二年の断海梁橋は「於越中高岡加州大守瑞竜院殿百五十年忌調経勤」とある。

長野 興禪寺 1回

恕仲派下
真巖派 1

※1の寛政七年は遠江大洞院の代住。また巽堂泉随は「国君加州公江年賀相勤」とある。

長野 泉竜院 2回

恕仲派内
物外派 1

恕仲派下
物外派 2

※1の延宝九年、2の天明六年は共に遠江大洞院の代住。また2の天明六年の竜山泉活は「未五月七日出駕、十一日辰ノ上刻奏雲院小祥忌於宝円寺調経相勤者也」とある。

長野 華林院 1回

如仲派内
喜山派 1

美濃

岐阜 長国寺 1回

恕仲派下
喜山派 1

※1の寛政四年は遠江大洞院の代住。

飛彈

岐阜 雲竜寺 6回

了堂派内
竹窓派 1 2 3

了堂派 4

太源派 5 6

※1の慶長八年、2の寛永九年は能州とあり、3の寛文六年、4の明和六年、5の寛政十一年、6の天保六年はいずれも飛州となっている。

丹波

京都 竜穩寺 6回

了堂派内
太谷派 1 2

了堂派下
太谷門葉 3

了堂派下
太谷派 4

通幻派 5

了堂派 6

※5の天明元年は能州芳春院代住、3の元禄七年梅嶺春芳に「乙亥二月梅嶺遷化也法孫大達晶道補充住職矣」とある。また6の享保十五年乾道一運に「以本山再住之功皈先師乾萬慧元和尚則建置牌」とある。

京都 徳雲寺 7回

了堂派内
太谷派 1 2

了堂派内
太谷之孫 3

了堂派
太谷末 4

了堂派 5 6 7

※3の貞享三年東海惠林に「金沢年礼勅之」とある。

大和

奈良 悟真寺 5回

了堂派内
奇惣(叟)派 1

了堂派内
竹窓派 2 3

了堂派下
竹窓派 4

了堂派
竹窓派 5

奈良 慶田寺 4回

了堂派
奇叟派 1

了堂派内
奇叟派 2 3

了堂派下
奇叟派 4

奈良 十輪寺 1回

了堂派内
奇叟派 1

※1の慶長十七年は能登普蔵院門中興禪寺代住。なお『御直末・元輪番地寺院名鑑』の三重興禪寺は普蔵院門中興禪寺の誤りである。

近江

滋賀 曹沢寺 4回

了堂派内
竹窓派 1 2 4

了堂派下
竹窓派 3

紀伊

和歌山 窓簀寺 4回

如仲派内
大輝派 1 2 3

梅山派 4

※1の寛永十年、2天和三年、3宝暦三年、4文政八年は共に遠江大洞院の代住。

備中

岡山 法泉寺 1回

了堂派
太谷派 1

石見

島根 竜昌寺 6回

了堂派 1 2 3 4

太源派
了堂派 5

太源派 6

豊後

大分 宗玄寺 1回

梅山下
真巖派 1

※1の寛保元年は遠江大洞院の代住。

薩摩

鹿児島 金鐘寺 1回

了堂開山 1

加賀

石川 玉竜寺 9回

梅山派内
太初派 1 2 3 4

梅山派下
太初派 5

梅山下
太初派 6 7

太初派 8 9

※1の天正十七年は越中とあるも、2の元和二年から9の弘化元年まで加州となっている。

能登

石川 竜門寺 3回

梅山派内
大初派 1 2 3

※1の文禄四年、2の慶長十八年は貫応成賀が二回輪住している。
また『御直末・元輪番地寺院名鑑』は号名が観応になつてゐる。

石川 徳翁寺 2回

如仲派内
喜山派 1 2

※1の天正十五年、2の慶長六年いずれも儀州頂善が輪住してゐる。

石川 満福寺 5回

梅山派流
如中派 1

如中派内
物外派 2 3 4 5

※1の天正十九年、2の慶長三年はいずれも無庵采紋が輪住している。また5の正徳四年は遠江大洞院の代住。なお『御直末・元輪番地寺院名鑑』は寺名万福寺とするも『普蔵院住番牒』は満福寺である。

石川 徳林寺 2回

梅山派流
太初派 1

梅山派内
太初派 2

※1の慶長五年と2の慶長十三年は共に久山周長が輪住してゐる。

また慶長五年には「大聖寺乱故如此勤申候」とある。

石川 興徳寺 2回

梅山派内
大初派 1

梅山派内
大初派 2

※1の天正十六年、2の文禄二年は共に大頭伝竜が輪住してゐる。

石川 興禪寺 1回

了堂派 1

※1の慶長十七年は大和十輪寺の代住。

石川 芳春院 1回

恕仲派 1

※1の天保十一年は遠江大洞院振輪番出羽瑞竜院の代住。

越後

新潟 正法寺 3回

梅山下
傑堂派 1

傑堂派 2

太源派 3

※1の延享三年、2の文化三年、3の慶応二年いずれも越後慈光

寺の代住。また1の霊源洞水は『御直末・元輪番地寺院名鑑』
では洞水霊源となっている。

新潟 吉祥寺 2回

梅山派
傑堂派 12

※1の安永五年、2の天保七年はいずれも越後慈光寺の代住。

新潟 願成寺 2回

梅山下
傑堂派 1

傑堂派 2

※1の明和元年、2の文政七年はいずれも越後慈光寺の代住。

新潟 慈光寺 26回

梅山派内
傑堂派 14

梅山派之丙
傑堂派 2

梅山派
傑堂 3813

梅山下
傑堂派 5671011121415

梅山派下
傑堂派 9

傑堂派 161718202122

梅山派 19

太源派下
傑堂派 23

太源派 242526

※1の元禄五年、3の享保七年、8の宝暦二年、13の天明二年、
19の文政元年、23の天保十三年の六回以外はすべて代住である。
それらは2宝永七年越後雲洞庵、4享保十三年越後雲洞庵、5
享保十九年奥州松林寺、6元文五年越後安養寺、7延享三年越
後正法寺、9宝暦八年越後雲洞庵、10明和元年越後願成寺、11
明和七年越後長禪寺、12安永五年越後吉祥寺、14天明八年越後
雲洞庵、15寛政六年奥州松林寺、16寛政十二年越後安養寺、17
文化三年越後正法寺、18文化九年越後雲洞庵、20文政七年越後
願成寺、21文政十三年越後長禪寺、22天保七年越後吉祥寺、24
嘉永元年越後雲洞庵、25安政七年越後安養寺、26慶応二年越後
正法寺でいずれも代住である。なお3の享保七年以降は安政元
年奥州松林寺の輪住を除き、原則として六年おきに代住させて
いる。

新潟 安養寺 3回

梅山下
傑堂派 1

傑堂派 2

太源派 3

※1の元文五年、2の寛政十二年、3の安政七年はいずれも越後
慈光寺の代住。

新潟 耕雲寺 25回

梅山派^{太源派内} 1 6 9 13 17

梅山^{梅山下}派 2 3 7 8 10 12 15 16

傑堂派^{梅山門下} 4

太源派^{峨山派} 5

傑堂派^{傑堂派} 11 19 21 22 24

南英派^{傑堂派} 14

梅山派 18

太源派 20 23 25

※1の元禄二年、5享保四年、13明和四年、20文化十三年、25文久三年の五回以外はすべて代住である。それらは、2宝永四年奥州輪王寺、3正徳三年奥州松音寺、4享保元年常州耕山寺、6享保十年越後種月寺、7享保十六年越後東福院、8元文二年奥州天寧寺、9寛保三年羽州玉川寺、10寛延二年奥州輪王寺、11宝暦五年奥州松音寺、12宝暦十一年常州耕山寺、14安永二年越後大慈寺、15安永八年越後東福院、16天明五年奥州天寧寺、17寛政九年羽州玉川寺、18享和三年奥州松音寺、19文化六年常州耕山寺、21文政十年越後東福院、22天保四年奥州天寧寺、23天保十年羽州玉川寺、24安政四年常州耕山寺でいずれも代住である。なお寛政三年奥州輪王寺、文政四年越後種月寺代住の佐渡本田寺、弘化二年奥州輪王寺、嘉永四年奥州松音寺代住の同

国法輪寺を除き原則として六年おきに代住させている。

新潟 大慈寺 1回

南英派^{傑堂派} 1

※1の安永二年は越後耕雲寺の代住。

新潟 種月寺 4回

梅山派^{梅山派内} 傑堂派 1 2

太源派 3 4

※2の享保十年は越後耕雲寺の代住。3文政四年は佐渡本田寺、

4の明治二年は越後福嚴寺、いずれも代住である。

新潟 福嚴寺 1回

太源派 1

※1の明治二年は越後種月寺の代住。

新潟 長禪寺 2回

梅山派^{梅山下} 傑堂派 1

傑堂派 2

※1の明和七年、2の文政十三年は共に越後慈光寺の代住。なお1の説淵黙宗に「太源和尚四百年之大忌相勤」とある。

新渴 雲洞庵 6回

梅山派内

傑堂派 1 2

梅山派下

傑堂派 3

梅山下

傑堂派 4

傑堂派 5

太源派 6

※ 1宝永七年、2享保十三年、3宝暦八年、4天明八年、5文化九年、6嘉永元年、いずれも越後慈光寺の代住。

新渴 東福院 4回

梅山下

傑堂派 1 2 3

傑堂派 4

※ 2の享保十六年、3の安永八年、4の文政十年は共に越後耕雲寺の代住。

佐渡

新渴 本田寺 1回

太源派 1

※ 1の文政四年は越後種月寺の代住。

陸奥

福島 常光寺 2回

如仲派

不琢派 1

太源派 2

※ 1享保十一年、2寛政十年共に遠江大洞院の代住。

福島 竜泉寺 7回

梅山派内

太初派 1 2 3 4 5

太初派 6 7

福島 松林寺 3回

梅山下

傑堂派 1 2

傑堂派 3

※ 1享保十九年、2寛政六年はいずれも越後慈光寺の代住。

福島 天沢寺 5回

梅山派内

太初派 1

梅山派下

太初派 2 3

太源派 4 5

福島 同慶寺 8回

梅山派内

太初派 1 2 3 4 6

梅山派下

太初派 5

太源派 7 8

※5宝永五年の徳林自覺に「文章院將軍宣下之御札西ノ丸ニテ相勤 四月癸足六月帰山」とある。

福島 法輪寺 1回

傑堂派 1

※1の嘉永四年は奥州松音寺の代住。

福島 東禪寺 5回

(空白1)

梅山派内
太初派 2

梅山下
太初派 3

太初派 4

太源派 5

※1の万治三年は殿堂造立のため、代金を出し輪住の功にあて門中正覺寺・興禪寺・正福寺・長泉寺監寺に代住させている。

福島 竜門寺 5回

梅山派内
太初派 1

梅山派内
太初派 2 4

太初派 3

太源下
明林派 5

福島 天寧寺 4回

梅山下
傑堂派 1 2 3

傑堂派 4

※2元文二年、3天明五年、4天保四年は共に越後耕雲寺の代住。
また3天明五年大器貫道に「丙午六月十二日加州仲将公御逝去、於宝円寺諷経勤、六月廿六日出駕」とある。

宮城 松音寺 4回

梅山下
傑堂派 1

傑堂派 2 4

梅山派 3

※1正徳三年、2宝暦五年、3享和二年は共に越後耕雲寺の代住。
4嘉永四年は奥州法輪寺代住。

宮城 輪王寺 4回

梅山下
傑堂派 1 2 3

太源派 4

※1宝永四年、2寛延二年は共に越後耕雲寺の代住。なお2寛延二年廓然卓宗に「元来雖耕雲寺代住依願此後ヨリ請疏ハ直ニ遣

ス」とある。

宮城 大雄寺 1回

(空白) 1

※1の文化十三年は遠江大洞院の代住。

宮城 雄山寺 1回

梅山派内
不琢派 1

出羽

山形 瑞竜院 7回

如仲派内
物外派 1

梅山派内
物外派 2

梅山派内
怨仲派 3

梅山下
怨仲派 4 5 6

怨仲派 7

※3元禄九年、4享保十七年、5明和五年、6文化元年は遠江大洞院の代住。7天保十一年は遠江大洞院振輪番能登芳春院代住。

山形 善宝寺 6回

梅山派内
太初派 1 2 3 4

太源派 5 6

山形 玉川寺 4回

梅山派
傑堂派 1

太源派内
梅山派 2 3

太源派 4

※2寛保三年、3寛政九年、4天保十年は越後耕雲寺の代住。

山形 天正寺 5回

了堂派 1 2

梅山派内
如仲派 3 4

太源派 5

※2の寛文十年は寺名が天照寺となっている。

秋田 竜門寺 5回

梅山派内太初派平
大輝派 1

梅山派内
太初派 2 3

太源派 4 5

つぎに普藏院輪住と出世転衣の日時の関係、輪住寺院の門派や地域性、さらには輪住回数などを中心に、輪住の実情と問題点について考察したい。まえにも述べたように、輪番地寺院は五院中最多の一〇三ヶ寺であるにも拘わらず、いかなる事情か明らかでないが、慶長十七（一六二二）—十八年、承応元（一六五二）—二年の二回にわたり欠住がある。また普藏院への輪住は、天正十五（一五八七）八月十五日の能州七尾徳翁寺儀州頂善から、明治二年（一八六九）八月十五日の越後蒲原郡福巖寺〔祖契〕禅翁まで二八四人を数える。しかし二回輪住しているものが五人いるから、実質二七九人である。二回輪住したものは天正・慶長期で、いずれも能登国の寺院であるが、つぎのとおりである。

徳翁寺儀州頂善（天正十五・慶長六年）

興徳寺大頭傳龍（天正十六・文禄三年）

満福寺無庵榮紋（天正十九・慶長三年）

龍門寺貫應盛賀（文禄四・慶長十八年）

徳林寺久山周長（慶長五・十三年）

また普藏院輪住者二七九人中總持寺へ出世（転衣）したものは現在判明している限りにおいて、一六八名であるから、未転衣のものが一一一人で、約四〇%にのぼっている。これは元和元年に出された徳川家康の「總持寺諸法度」^①の編旨を得て出世転衣の披露あるべしとする第二条、出世の戒臘は編旨の日付次第とある第三条、紫衣の着用規定の第四条などに違背し、該当しないことになる。また五院住持における現方丈の順次決定も戒臘によるとされ

るがこれも不可能になる。如何様に理解したらよいか今後の問題である。

また万治二年（二六五九）三月八日、関三刹の「覚」五ヶ条の第三条に

一、無着傑堂両派近代為瑞世就本寺不動門役事心外之至也。従今普藏院如意庵輪番之任職被相勤様^二申渡旨尤也。其趣急度可被申渡者也。若於異儀者三ヶ寺^江可被申達歟。其節以評議可被申候事^三

とあるが、無着派は如意庵に三十五回輪住しているのに反し、傑堂派は普藏院に一回も輪住しておらず、関三刹の「覚」に違背していることも注意しなければならない。

また普藏院への輪住と、總持寺において出世転衣した日時との關係をみると、つぎのようになる。

(1) 出世転衣後普藏院輪住まで三〇年以上経過したものが七人、（三六年がもつとも長く、一四〇五一世盤住）、二〇年以上二三人、一〇年以上二七人、一〇年以下三ヶ月まで三二人で、合計八九人である。

(2) 出世転衣直後普藏院へ輪住したものの六九人であるが、翌日三人（初見天和三年八月十四日九三八三世伝正）、二日三人、三日四人、四日一〇人、五日二人、六日五人、七日五人、八日九人、九日三人、十日二人、十二日三人となっている。

(3) 普藏院輪住中に出世転衣したもの一〇人であるが、輪住直後（翌日）慶長二年八月十六日、一三三三二世別峯^三應（一二二日）七人、五ヶ月一人、退院前五日一人（寛文八年七月二十日、七五九七世万国）、八日一人である。

従来は一旦住持職を経て出世した人の中から、五院輪番の再住を選んだとしているが、⁽¹⁾はこれに該当するも、⁽²⁾は普藏院輪住にあたり、急遽出世転衣を行った感が強いばかりか、出世転衣の後上洛して道正庵の寮舎に宿泊し、参内の坐作進退を習得して、伝奏勧修寺家を介し朝廷から綸旨を頂戴することも到底不可能である。⁽³⁾に至っては、

先述の未転衣者の輪住とあわせ、従来の説に矛盾するもので、今後の解明が必要である。

また普藏院に輪住した寺院の派名は、天保十一年（一八四〇）に輪住した通幻派の芳春院をのぞきすべて太源派で、梅山派下と了堂派下である。表記されている派名を掲げてみると、太源、梅山、如（恕）仲、大輝（暉）、石叟、物外、喜山、宗（崇）芝、真巖、不琢、逆翁、太初、明林、如幻、傑堂、南英、了堂、竹窓、太容、奇叟である。なお通幻派の芳春院は、遠江大洞院の振輪番出羽瑞竜院（如仲派下物外派）の代住であるから、派名は恕仲派としている。

また輪住した寺院は、栗山泰音『總持寺史』五院輪番地に掲げられている寺院一〇三ヶ寺のすべてと、輪番地以外の寺院である遠江長福寺・大洞院（本山直末）、三河東漸寺、越後福巖寺および山内の芳春院・興禪寺などで合計一〇九ヶ寺である。これを地域別にみると、東海地方の四七ヶ寺（遠江二九、駿河九、三河六、尾張三）がもつとも多く、約半数近くを占めている。つぎに陸奥一三ヶ寺、越後一二ヶ寺、出羽五ヶ寺などとなっている。

また輪住した一〇九ヶ寺のうち一回のみの寺院は四五ヶ寺を数えるが、そのうち遠江大洞院、越後耕雲院・種月寺などの代住が二八ヶ寺である。もつとも多く輪住（代住も含む）したのは大洞院で六一回にのぼるが、それは元禄六年（一六九三）以降、原則として三年周期になっている。しかしすべて遠江・駿河を中心に、三河・信濃・紀伊・出羽・能登・尾張・美濃・陸奥・豊後の支配下寺院（門末）に代住させている。『嶽山史論』一四三頁によると、代住させた門末寺院十六ヶ寺（遠江智満寺・世楽院・林叟院・長松院・崇信寺・増參寺・瑞雲院・最福寺・金剛寺・天竜院・三河竜門寺・西明寺・周昌院・尾張福巖寺・陸奥大雄寺・紀伊窓營寺）としているが、それ以外に駿州真珠院・増善寺・永明寺・成安寺・大正寺、遠州三光寺・円明寺・聖寿寺・青竜院・極樂寺・長福寺・華嚴院・善勝寺・栄泉寺・竜登院、三州東漸寺・靈巖寺、尾州天沢院、濃州長国寺、信州真法寺・泉竜院・興禪寺、熊

州満福寺・芳春院、奥州常光寺、羽州瑞竜院、豊後宗玄寺の二十七ヶ寺を数えることができる。とりわけ紀伊窓誉寺は四回、遠江世楽院・増参寺、信濃真法寺は三回上山しているが、いずれも大洞院の代住である。なお出羽瑞竜院は七回中四回は大洞院の代住である。これは大洞院自体が輪住制であつたからである。

つぎに越後慈光寺の二六回と、同国耕雲寺の二五回であるが、慈光寺は享保七年（一七二二）以降、耕雲寺は宝永四年（一七〇七）以降六年周期になっており、いずれも二〇回代住させている。そのほか加賀玉竜寺の九回、陸奥同慶寺八回、丹波徳雲寺・陸奥竜泉寺・出羽瑞竜院七回であるが、瑞竜院の場合は五回が代住によるものである。

また越後雲洞院の六回、同国正法寺・安養寺の三回はすべて同国慈光寺の代住であるが、越後東福院と奥州天寧寺はともに四回のうち三回は越後耕雲寺の代住である。また越後種月寺は四回であるが、自ら上山したのは一回のみで、一回は耕雲寺の代住、後の二回は越後福厳寺と佐渡本田寺に代住させている。また奥州松音寺は四回のうち三回は越後耕雲寺の代住であるが、後の一回は奥州法輪寺を代住させている。

つぎに輪住は莫大な経費が必要にも拘わらず、まゑに述べたように能登の五ヶ寺は二回輪住しているが、これは曩祖に対する厚い報恩行のあらわれとしなければならない。しかし、久山周長を除きいずれも『總持寺住山記』にその名が記録されていないから、出世転衣しなかつたものと思われる。

最後に問題点としていくつか掲げてみる。

(1) 遷化や老躬のため、法孫や徒弟が代行している。それは元禄七年（一六九四）に上山した丹波竜穩寺の梅嶺春芳が任期途中の八年二月に遷化したので、法孫の大達嶋追が補住しており、また正徳二年（一七二二）相模徳翁寺の無関法禪が老躬のため、徒弟大統来禪が代勤している。

(2) 代金を拠出して、山内門中に補住を依頼し、輪住一回に充当している。万治三年（一六六〇）奥州岩城東禪

寺はすでに何回も輪住しており、（実際には一回もしていない）また殿堂を建立中であるから、代金（金額不明）を払い、山内門中正覺寺・興善寺・正福寺・長泉寺の監寺に補住を依頼し、輪番一回に充当している。これは輪番役を金子によつて代替するという非常に注目すべきことである。

(3) 延宝元年（一六七三）輪住した遠州三倉榮泉寺綴山元補は開山瑩山の三百五十回忌に退院し、明和七年（一七七〇）越後長禪寺の説淵黙宗は太源和尚四百回大遠忌を勤めている。

(4) 檀越前田家一族の法事を金沢宝円寺・玉泉寺や高岡瑞竜寺で勤め諷経している。記録されているものを示すと、延享四年（一七四七）遠江崇信寺の鉄翁盤柱は金沢大守大応公（七代前田宗辰）一周忌、宝暦十二年（一七六二）信濃真法寺の断海梁橋は瑞竜院殿（前田利長）百五十回忌、明和五年（一七六八）羽州米沢瑞竜院光嶽珉瑞は宝円寺において謙徳院殿御法事焼香、明和八年遠江長福寺の英門豪山は前田利長室玉泉院殿百五十回忌諷経、天明六年（一七八六）奥州天寧寺の大器貫道は加州仲将（十代前田重教）泰雲院公御逝去諷経、同七年信濃泉竜院の竜山泉活は泰雲院小祥忌（一周忌）諷経などである。

(5) 大檀越前田家に対する年始挨拶が隔年に行われていたが、記録のうえからは貞享三年（一六八六）丹波徳雲寺の東海恵林、宝永三年（一七〇六）奥州三春天沢寺高室麟堂、享保二年（一七一七）遠江最福寺大鱗巽鯨、同二十年（一七三五）遠江世楽院癡外宗愚、元文二年（一七三七）奥州会津天寧寺光外重圓、明和二年（一七六五）駿河真珠院玉鳳長瑞、安永八年（一七七九）越後東福院南嶺普泉、寛政七年（一七九五）信濃興禪寺巽堂泉隨の八人が知られている。

(6) その他の記録として能登徳林寺久山周長が慶長五年（一六〇〇）輪住したのは「大聖寺乱故如此勤申候」とあり、宝永五年（一七〇八）奥州同慶寺徳林自覺は「文章院將軍宣下之御礼西ノ丸ニテ相勤」めている。ま

享保十五年（一七三〇）丹波竜穩寺乾道一運は「以本山再住之功歸先師乾万惠元和尚則建置牌」とある。なお宝暦七年（一七五七）奥州三春天沢寺即山重觀の項に「金沢登城」とある。

(7)最後に普蔵院輪住について、つぎのような注目すべき事例が二件あるので紹介しておきたい。一つは応永二十三年（一四一八）十二月十三日の「梅山聞本置文」^⑦（山形・乗慶寺文書）にある普蔵院出仕の経費についてである。置文は梅山聞本^⑧（？一四一七）が買得した越前榎富中荘は竜沢寺（福井・あわら市）住持が末代まで所管すること、また中荘から三十貫文を門派として普蔵院への出仕経費にあてること、なお不作の時は勘略し、豊作の時は了堂派にも充当するとしている^⑨。

つぎに總持寺輪住制の変容のところで触れたが、永享九年（一四三七）正月廿五日の「如仲天闇遺戒写」である。如仲天闇（一三六五—一四四〇）は梅山聞本の弟子で總持寺四十世であるが、總持寺出仕や普蔵院塔主、および竜沢寺・仏陀寺（石川・廃寺）住持などについて門弟に書き置きたものである。まず總持寺の出仕は力の有無により随意であるが、それは偏えに曩祖の報恩行であるから、出仕を欠いてはいけないとしている。また竜沢寺を本寺として堅く輪守し、これを欠するものは弟子に非ずとするのみならず、普蔵院寄進の三十貫文は取り止めて竜沢寺の修理料にするとしている。また普蔵院塔主について法脊の次第は末弟から勤めるよう定めているのみならず、總持寺出仕を欠いてでも仏陀寺五箇年の住持は遵守するよう示し、違背のものは嗣法の輩ではないとしている。

このように曩祖の報恩行として總持寺出仕は重視しているが、さらに竜沢寺を本寺として堅い輪守を課していること、普蔵院寄進の三十貫文を竜沢寺の修理料にすること、普蔵院塔主は末弟から勤めること、仏陀寺五箇年の住持は、總持寺出仕を取り止めても遵守することなど、總持寺や普蔵院塔主の出仕よりも、竜沢寺や仏陀寺の輪住を重視していることがわかる。

このような衝撃的な動向は単に竜沢寺や仏陀寺のみならず、両寺が所在する越前や加賀地方、さらには「梅山間本置文」と「如仲天閼遺戒写」を所蔵する乗慶寺や崇信寺のある出羽・東海地方にもあったかも知れない。また梅山・如仲の太源派以外においても、あるいは波及したかも知れないが、今後の研究に俟ちたい。

(続く)

- (1) 『新修門前町史』資料編2 總持寺九五頁参照。
- (2) 『總持寺史』五五七頁参照。
- (3) 二七〇五世経嚴東文(相州花翁院)で、相州宝泉寺名代で輪住しているから、何か事情があったかも知れない。
- (4) 『總持寺史』五三七頁参照。
- (5) 『總持寺史』五四〇頁参照。
- (6) 『新修門前町史』資料編2 總持寺一八二頁参照。『安政六年(一八五九)諸般書上』に「隔年加州家江總持寺直參年礼之節諸入用」として百五十兩を計上している。
- (7) 『新修門前町史』資料編2 總持寺四七頁参照。
- (8) 總持寺十一世、明徳元年(一二三九)入寺。越前竜沢寺、遠江大洞院、越前耕雲寺開山。
- (9) 『新修門前町史』資料編2 總持寺四七頁参照。

〔追記〕『總持寺住山記』の検索にあたり、鶴見大学講師尾崎正善氏および、大本山總持寺宝物殿学芸員遠藤ゆかり・内藤沙織氏の協力を得た。